豫備隊が何れも二個宛あることてある。即ち右には志波大隊と第一大隊の殘餘の二中隊が、前後に重なつて縱長に二個の豫備隊を成形して居ると共に。左翼地區に於ては步兵第四十七聯隊第三大隊(第十二中隊欠)が、砲兵陣地の後方の豫備隊として控へて居る、其又直ぐ南方の灤河の三叉點の附近には、第一中隊と第五中隊と第六中隊の一小隊が混成の一團をなして、これ又二ヶ所に横に列んて豫備隊の形をなして居る。陣地が過廣てあつて交通が不便なる場合には隨分豫備隊を分置するも必要てあらふが、其樣な場合てない此の陣地に於てはこれは實に不思議なやり方てあると思ふ。て或は右翼地區の第一大隊の半部と、左翼地區の第三大隊の三中隊は或は何れも旅團の豫備てあつたかも知れぬ。左すれば理由のたゝぬことはないが、それなれば戰史は其ことを文面の上に書き現はして置くべきてある。然るに旅團の豫備に就ては一言も半句も之に及んて居らぬ、して見ると此の兩地區指揮官は何れも不思議なる、そして不必要なるに二ヶ所に豫備隊を備へたものとするが當然の判斷

てあつて、それでは何の爲めに此樣なことをしたかゞ全く不明になつて仕舞のてある。て理由の立つ如く假りにこれを旅團の豫備てあるとしてもまだ少しく變てある。何も交通が不便でもなければ土地が斷絶して居るのてもないのに、僅々二三百米突を隔てゝ旅團の豫備を二ヶ所に分置する必要が何所にあるか。斯く考へて見ると何れにしても此配備に於て豫備隊の四ッあるのは、全く以て了解に苦しむ不思議の一つてあると評者は思ふのてある。

さて我前哨が午後二時半過ぎに陣地の正面をあけて退却すると、案の如く敵は其後に追ひすがつて步騎混合の部隊を以て之れを追擊して來る。其中に其後方韓家堡子の方からは砲を以て少なくも六門程の砲を以て、稻村大隊の退却を砲擊するといふ有樣。我兩前哨が全く本陣地の後方に收容される頃には、敵の第一線は劉家堡子東南高地附近に進んて來て、其砲兵もこれと共に前進を續けて來る。午後四時前後には先に第十四聯隊の第十二中隊が、志波大隊の退却を掩護收容したる、南荒地西方無名廟のある高地附近迄敵の主力

が進出して、其砲兵は勢すさまじく本道をずん〳〵前進して來るといふ權幕。こゝに於てか我が砲兵第一大隊は最も適好なる良射程内に平氣でずん〳〵進んで來る敵の騎砲兵に對して、南北兩陣地から一時に百雷の轟發を喰はせてどんなものかとばかり我が砲兵の小手しらべをやつて、敵の狼狽混雜を極むる虚に乘じて猛烈にこれに鐵火の雨を降らせたが。仰天したる敵は陣地を選む樣な暇のあらふ筈がない、直に其儘道路の上に急に放列を布いたがそれでも一門は全く射撃することが出來ぬといふ大周章。我砲兵と僅かに三分間對戰した而已で滿腹する程我砲彈の御馳走に預かり、ほう〳〵の態で砲を棄てゝ何れも散り〳〵に其後方に潜匿するといふ始末。我が砲兵は確かに其陣地が適當に配置せられたといふことを、此所に至つて實際に證明し得たのであつた。此の砲兵陣地に就ては野砲兵操典第二部の

『第三　砲兵ハ通常大隊毎ニ一群トシテ使用スルモノトス然レドモ狀況ニ依リ中隊ヲ獨立シテ使用シ(下略)

大ナル砲兵部隊ニ在リテハ一連ノ陣地ヲ占ムルコトナク勉メテ建制ヲ保チ指揮ノ統一ヲ害セザル限リ之ヲ數群ニ配置スルヲ有利トス是レ地形ノ利用便ニシテ且ツ敵火ノ效力ヲ減殺シ得ルノミナラズ尙集團ノ效果ヲ收ムルコトヲ得レバナリ』

とある通り大なる砲兵ではないけれどもが、地形を利用する爲めに此の砲兵大隊は此の條文の主意に準據して、且つ同操典第二部防禦の章の第六十三に『(前略)之ガ爲メ砲兵ハ能ク地形ヲ利用シ豫期スル敵ノ攻撃方向ニ其火力ヲ集中シ最近距離ニ至ルマデ攻撃歩兵ヲ射撃シ得ル如ク其陣地ヲ選定スルヲ要ス(下略)』

とあり更に同第六十四に『敵ノ種々ナル攻撃方向ヲ顧慮シ斜射及十字火ヲ逞フシ云々』とある諸條項を守つて陣地を選定した上に、同操典第二部第一の『至大ナル發射速度ヲ利用シ不意ニ敵ヲ急襲スルトキハ其效果一層顯著ナリ』又同第二に『砲兵ハ常ニ機先ヲ制シ敵ニ優ルノ砲數ヲ使用スルヲ原則トス』とある諸

原則を巧に應用して。敵の騎砲兵が油斷千萬にも我が砲兵の良射程内へ平氣でのこ〳〵は入り込んだ所を見すまし、疾風迅雷そつちのけの勢を以て十字火を施し得る如く選んだ良陣地から、不意に機先を制して優勢なる砲數を以て有效無比の砲撃を加へたのであるから。敵が大切な其生命よりもまだ〳〵ずつと大切なる砲煩をすてゝ、一時後方へ遁匿して仕舞たのは無理もない次第で。此の砲兵は實に申分のない大效果を奏し得たものと稱賛するが至當であつて、これは實に此の合戰第一のお手柄〳〵と評者は大にお褒め申上げて置く次第である。斯くの如く慘々な目にあつた敵砲兵は繋駕して退却せんとしたが其目的を達せずして、一時後方へ潰崩して仕舞ふといふ爲體であつたが。それ等の不利なる狀況に少しも頓著せずして、敵の歩兵と徒歩せる騎兵とは大なる騎兵の後續隊を隨がへて、我が此の有效なる一大隊十八門の砲兵火をものともせず、漸次に兵力を增加しつゝ一進一止して我陣地に近迫し。終に敵は我が本陣地から一千乃至九百米突位を距だゝれる、南荒地北方から

南荒地ニ砲ヲ委棄セルル露軍砲兵

黃家堡子に亘る約略二千米突に亘る正面に、歩騎兵混合の約二大隊程の兵力を展開して、烈しき我全線の歩兵射撃の爲めに其行進が困難なるに至る迄前進したが。何として此の陣地をあれ位の兵力で攻撃することが出來樣、午後の六時過ぎから或は退却するものあり或は進み迫るの樣を示すもののありといふ有樣て、頗ぶる其行動が統一を缺く樣になつて來た。

此場合まて戰闘を進めたならば、多分佐々木少將には敵の兵力がどれ位のものてあつて、それが我が此の佐々木支隊の兵力より多いか少ないか位は知れた筈てある。そしてそれの大部分は騎兵てあつて歩兵は餘り多くないといふことも知られたてあらふ、又其劣勢なる砲兵は我砲兵の爲めにたつた三分時の後には全く沈默させられた而已か、其砲煩を委棄して逃げ出した有樣も見へたに相違ない。此の樣なる場合に際し支隊長は如何なる處置に出づべきかこれ實に大に研究すべき問題てはあるまいか。十八日に得た情報に依つて見ても敵は我より優勢てはない。即ち彼は歩騎六千、砲八門といふ評判てあつ

て。それが此の二十一日愈〻前面に迫つて展開した狀況を實見しても、それ以上には確かに大に增加隊を得て居らぬことは、兩前哨の報告でも知れ樣し、又大甸子門西北標高四〇四高地の上などから見れば、敵の兵力は一人を餘すことなく計算することが容易に出來るから、多分此所に居た步兵第四十七聯隊の一部隊からは詳細なる報告があつたに相違ない。元より我が此の支隊と兵力上左して大差を有たぬ敵に向つて、無暗に堅固なる防禦陣地を棄てゝ、飛び出してゆくといふことは頗ぶる無謀であらふが、去ればとて此日に於ける敵の行動は甚だしい拙劣な蕪雜なものであつて、其兵力は確かに我が三分の一以上のものではないのは明である。その上に其劣勢なる砲兵は我が砲兵の十字火に辟易して砲をすてゝ逃げて仕舞たのであるから、我に七八分の强味があるのである。少し僭越な申分だが若し評者が此の時此の支隊長であつたとしたならば、彼の午後四時半頃に於て敵の砲兵が潰亂したる機に投じて、步兵第四十七聯隊の霎河の南方に居る第一大隊而已を陣地に殘し、兩陣地から

の砲兵の猛烈なる攻擊準備の下に、正々堂々四個大隊餘の全力を以て攻勢に轉じて見たかつたと思ふ。敵の第一線の步騎兵は今や其背後に於て其騎砲兵が僅々三分の間に默滅せしめられたといふ失態に、少なからず志氣を沮喪せしめて居る所へ。其頭の上からは我が十八門の大砲の大砲擊を浴せられて、頗ぶる前進に困難しつゝもなほ前進を努力して居る所へ、我が此支隊が主力を提さげて本街道を中央にして攻勢に轉じたならば、敵は思ふに一支もなく退却して仕舞たであらふ。否多少の抵抗も多少の戰鬪もやりはやつたであらふが、決して頑强なる抗戰は出來なんだに相違ないと思ふのは、餘りに突飛なる考案として評者の意見を頭から排斥否認して仕舞程に、それ程に無謀な又無理由なやり方ではあるまいと考へるのである。

實は自分は此の戰鬪の最初から、否々其戰鬪の始まらぬ前から此支隊が、餘りに大事をとり過ぎるのが氣に喰はぬのである。既に前哨の警戒法に付てもいふた如く、石橋兩杖は決して兵家の喜び用ゆべき上策ではない。然るに

どふも此支隊は常に石橋兩杖式を慣用手段とした樣に思はれる。それである
から自分は一つ突き出してレンネンカンフ將軍に大に一泡くはせてやりたく
て堪らぬのである。が併し佐々木少將の考案も決して無下に排斥すべきでは
ない、思ふに次に述る樣なお考からして終に其機を逸し去らしめたのではあ
るまいか。即ち旅團は兩三日前に增援を得てそれと協力して堅固なる防禦陣
地を構築したのであるから、敵が全く我と比較にならぬ程な劣勢のものなら
ば兎に角、相當なる兵力を有して我と殆んど同等と認むべき程のものである
以上は、一先づ持重して敵を此の堅固なる陣地の前までおびきよせて。此所
て大に彼れの攻撃の氣勢に向て大打撃を與へたる後、猛然起つて攻勢に轉じ
て彼を散々に追ひ散らさんと企だてゝ、敵が我が本防禦陣地に近迫するのを
待つて居たのであらふが。彼は前哨兩大隊の爲めに歩々の抗拒に出會し、千
辛萬苦漸くにしてこれを撃退して、愈その主なる兵力を展開して佐々木少將
の本陣を攻撃せんとする刹那に、思ひがけざる砲兵の大不覺を來したので攻

撃少しも進捗せず。終に夜を待つて退却するといふ大失敗に終つたのであつ
て、隨て其失敗に陷つたる敵の攻撃兵が今少し陣地に近よつたならば、今少
し前進して來たならば歩砲兩射撃で頗る烈しくたゝきつけて、その機に乘じ
て逆襲をしてやらふと考へて居たのであらふが。彼は前哨兩大隊の爲めに歩々の抗拒に出會し、千
くれぬ中に、遠慮會釋なく時間はたつて仕舞て、早や日沒に間がないといふ
時刻になつたものであるから、終に攻勢に轉ずるの機を失したのではあるま
いか。これは評者の想像であるが多分其樣なことであつたのであらふと思ふ
が、これ實に優柔不斷所謂愼重と持重に過ぎて石橋兩杖式を發揮したものと
いふを憚らぬのである。

前にも述べた如く旅團長は確かに戰史の記述し方では一兵の豫備も持つて
居らぬ、單にそれ而已ではない敵の主力は賽馬集本道の方から前進して來た
といふことが明瞭になつても、近家堡子、柏林川、車古嶺跑の三個中隊は依然其
儘にしてある所を見ると、此の場合此の將軍は此所で持久戰をやるつもりで

あつたのかも知れぬ。よしや警戒の爲めに四方に兵を出して置いても、愈〻敵の主力の進來の方面が明かに知れた以上は、若干の監視部隊を殘して可成其の兵力を自己の手もとに集結して、敵に對して機を見て攻勢に轉ずるの覺悟をすべきが當然である。勿論任務の上から考へて見ると、此の場合此所を守つて居りさへすればそれで自己支隊の任務は盡せるものであるから、强ち危險を冒して迄も敵を攻擊するの必要はないのであるが。さればとて敵が如何に劣勢でも敵が如何に過失や失態を犯しても、自分は任務が默まつて動かずに居れば盡せるといふ立場から、知らぬ顏の半兵衞さんを極めて懷ろ手で見て居るべき筈のものではあるまい。即ち此所が評者の主として論じて見たいと思ふ要點である。假令其任務は防禦して居れば結構に盡せるとしても、隙きがあつたならばそれに乘じて敵を粉な微塵にしてやらふといふ意氣込み、所謂攻擊精神なるものはいかなる場合にも決して無くしてはならぬと思ふ。若し支隊長に其考があつたとしたならば敵の攻擊方向が明かに知れると共に、

諸方に派出してある兵力も可成集結するがよし、又始めから相當なる旅團の豫備隊も控置するがよい。斯くして敵が攻擊して來る間に少しでも乘ずべきの隙を見せるか、又は拙ない失態を演出したる場合には、其機に乘じてこれに向つて猛然攻勢に轉ずるのが何より必要なことである。此の意氣がなければ到底戰は好果を收め得ぬのである。然るにどふも此の支隊長は最初から持久戰をやる考であつたらしい、其結果が諸方に出した合計三中隊の警戒兵も其儘にして置き、又旅團に少しの豫備も控置しなかつたのであらふ。これが抑〻の原因をなして好機に投じて攻勢に轉じ得なんだのではないか?、自分は此の支隊が座して敵の攻擊を待つて、終に此の頗ぶる的の失態を我前面にて演出しつゝある敵を、見す〳〵其任意に退却するを得せしめたる佐々木少將閣下の處置に對して、少なからざる遺憾を感ずるを禁じ得ぬのである。我歩兵操典第二部第五十四に曰く

『防禦ハ動モスレバ全ク受働ノ守勢ニ陷リ我ガ動作ノ自由ヲ失フニ至ルモノ

トス故ニ苟モ時機ヲ得バ決然攻勢ニ轉ゼザルベカラズ』

といふて居る、又佛國歩兵操典第二百六十六には

『專守防禦ハ敗軍ノ確實ナルモノトシテ明言シ得ベキガ故ニ絶對的ニ之ガ使用ヲ拒絶スルヲ要ス然レドモ攻勢的守勢ハ獨リ好果ヲ現出スベシ』

とあり又獨逸の歩兵操典第百三十九防禦陣地選定の所にも

『前界或ハ我防者ノ攻撃動作ニ有利ナル條件ヲ具備スルトキニ於テノミ價値アルモノトス』

とあるが如く、何れの國何れの軍でも攻撃を加味せぬ防禦は非常にこれを排斥して居る。露國の戰術教程にも『防禦戰鬪ハ之ニ加フルニ攻撃ヲ以テシ即チ敵ヲ壓倒シ其戰鬪ノ勝利ヲ確實ナラシムルヲ以テ本然ノ目的トナスベキヲ要ス』とある。勿論此の場合は持久戰をしても支障はない場合であつて、強ち前掲諸操典を以てこれを非難するのは少しく酷であるのは知つて居るが、假令持久戰をして居ればよい場合でも、敵が乘ずべき失態を演出して我にこれを

攻撃するの力を有しながら、默つて見て居るといふことはこれ實に怪しからぬ所爲であると評者は思ふ。で種々なる都合から攻勢に轉じ得なんだので、決して故意に此樣な專守防禦をやつたのでないのは明白であるが、其根原に遡のぼつて考へて見ると、此支隊が常に愼重に過ぎたる結果石橋兩杖の弊に陷つたものと、評者は斷案を下すのを憚からぬのである。

我より劣勢にして且其砲兵が大失態を演じたる敵は、我が佐々木支隊の機動に富んで居なんだのと、それこれする中に日が幸に暮れてくれたので、辛くも其大失態を暗の黑色で塗りかくして、命辛ら〳〵委棄したる砲煩を收容して、寂然聲なく又もや我が佐々木支隊に一杯喰はして、知らぬ間に賽馬集へ向つて退却して仕舞たが、全支隊が防禦陣地を占領した儘で露營したる佐々木支隊は、敵が此の夜の九時前後に退却して仕舞たのを翌日まで全く少しも知らなんだ、これも決してお手柄ではない頗ぶる間の拔けた次第である。斯くして我第一軍の右側を安全にして其糧秣集積の任務は完全に盡したが、

一大打撃を與へ得べかりしレンネンカンフ少將の歩兵二大隊半、騎兵八中隊、砲十二門の支隊を、見す〳〵取り逃がして安全に退却せしめたのは、何ぼう殘念千萬遺憾億兆の限りではないか。

さて例によつてこれから露軍に就て少しく批評を加へて見様、此の戰鬪の前々からの露軍の失敗は隨分多いが、それは全く拔きにして此の六月二十二日の攻撃動作のみに就て一言することにし様。レンネンカンフ少將は此時丁度諸方から賽馬集へ集まり來りたる歩兵一聯隊弱と騎兵八中隊、砲十二門を率ゐて、自分と殆んど同等位と見たる甕陽邊門の敵を攻撃せんと企だてたのであるが。此の甕陽邊門から賽馬集の間には其以前、少なからざる時日の間滯在して居たこともあり、其地形には略ぼ精通して居らねばならぬ筈のレンネンカンフ將軍は。六月二十二日午前六時三十分賽馬集を出發するに當つて、其支隊を二縱隊に分ち一縱隊を自から指揮して新開岑の本道を進み、他の一縱隊はこれをリユバウイン少將に率ゐしめて奈馬嶺を經て前進せしめたが。

此のリユバウイン縱隊は道路が極めて險惡てあつて、騎兵は到底通過困難空しく時間を費やすといふ所から、終に新開岑附近に於て兩縱隊は相合することになつた。此の樣に少なからざる時日の間自己部下の軍隊を以て占領して居た地方の、主要なる道路の狀況すらも知らぬといふ程に迂濶では、如何に優勢な兵力を持つて居ても決して戰勝を收め得るの見込はない、況んや其兵力は我軍よりは頗ぶる劣勢てあるに於てをやてある。そこて先づ第一番に進路選定の上に一つの過失を犯して新開岑を越て、首尾よく我が前哨を擊退して我が甕陽邊門の西方陣地に迫つたのはよいが。全力を用ひ盡しても猶ほ且つ兵力不足なるべき同支隊は、シヤチロフ少將と歩兵一大隊、騎兵三中隊及び頗る足しない砲兵二門を總豫備隊として韓家堡子西方渡場に殘したのは。思ふに其理由は退却收容の爲めではあらふがそも〳〵これが大間違ひてある。

『(前略)然レドモ勝利ヲ求メンガ爲メ豫備隊ヲ使用スルコトナク退却掩護ノ爲

メ之ヲ控置スルハ大ナル過失ニ屬ス』

とあるではないか。同少將は全力を盡して我佐々木支隊を攻撃すべき場合に於て、其砲兵しかも頗る少ない砲兵の一部までを總豫備隊といふ名のもとに、退却掩護の爲めに殘置したのである。これは我操典のいふが如くたしかに大なる過失である。更に其後貝加爾騎砲兵の六門に至つては、殆んど論外なる暴進をして、既に我れには二十門の砲があるといふことを情報で知つて居りながら、瀋陽邊門附近から山砲の良射程である距離迄、少しも注意も警戒もせずしてのこ〳〵と前進して、不意に我十八門の砲兵から猛烈なる十字火を頂戴したに至つては、言語同斷沙汰の限り批評の範圍を遠く超脫して居ると自分は思ふ。野砲兵操典第二部第四十一にもある通り可成近く敵に迫つて陣地を占領するが攻撃砲兵の守るべき原則であつて『山砲ハ其特性ヲ利用シ野砲ニ比シ一層敵ニ近ク其陣地ヲ選定セザルベカラズ』とあるから、其敵に接近して陣地を占領せんとした所爲は決して非難すべきではないが。同操典第二部

第七に

『地形及敵情ノ偵察ハ砲兵各指揮官ノ常ニ注意スベキ要件ナリ殊ニ陣地ノ偵察ニシテ巧妙且機宜ニ適スルトキハ既ニ成功ノ第一著ヲ占ムルモノトス』

とある敎訓を無視し、何等の注意をも拂はずして敵の良射程内に進入し、不意の急襲を被つて砲煩を委棄するに至つては、同第二部第十の

『砲兵ハ縱ヒ多大ノ損傷ヲ生ジ又全ク彈藥ヲ射耗スルモ之ガ爲メ陣地ヲ撤スルコトナク依然陣地ニ止リ之ガ補充ヲ待ツベシ』

との戒告にも背戻したるやり方で、實にいはふ樣なき大失態大倦怠といふべきてあつた。

斯くて此の支隊は亂雜にして且つ頗ぶる不統一なる攻撃を行ひ、稍滑稽に近かき大失態を演じて夜に入るを待ち、暗夜に乘じてそれでも漸くにして其失敗の跡と掃除をかつ〳〵に濟して。負傷將校七卒五十二、戰死卒二十五失踪二、斃馬三十九の損傷を以て儲けものとして、何等の得る所なくして此の戰闘

を終つたのであつて。此の靉陽邊門の附近では敵も味方も頗ぶる不手際千萬なる事をやつたのであつて、誠に壯快でない面白くない戰をやつたものであると評者は歎息に堪へぬのである。が併し其面白くない失態の多い戰であるが爲めに、讀者の爲めには更に大に研究にもなり敎訓にもなる點が、多々益々あるといふことは今までの論じ來つた種々なる理由で明白であらふ。

大正三年六月三十日印刷
大正三年七月三日發行

（戰史評論奥附）

著作者　無名戰士

發行者　東京市麴町區平河町四丁目十一番地　宮本林治

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　白土幸力

發行所　東京市麴町區平河町　宮本武林堂
振替東京一〇九一二

不許複製

如風居士著　●代金は前金を振替口座へ拂込みを乞ふ

戰史摘例　**步兵操典證解**　全三冊

價一部　四圓五拾錢　毎冊　壹圓五拾錢　內地郵稅　一部二十錢　毎冊拾貳錢

第一卷綱領　第二卷　戰鬪一般ノ要領、攻撃、防禦、追撃及退却　第三卷　夜戰、持久戰、山地、河川、森林、住民地ノ戰鬪、他兵種ニ對スル步兵ノ動作

總紙數千三百餘頁　引證戰例戰話約六百條　戰鬪實況繪畫六十葉　地圖戰圖大小五十二枚　製本本綴洋布製最美本

我操典の條項は本書によりて頗る易解且つ耽讀手を釋く能ばざる好讀物と一變し了れり、即ち其意義を講釋する爲めに、快刀亂麻を絕つ底の筆鋒を揮ひ、更に其理由を證明する爲めに內外古今多數の戰例就中日露の最新戰役を、最も多く最も適切巧妙に引用し、一々不動如山の大鐵案を下して、一見其原則のよりて生ずる所以の根原を知得せしむるのみならず、內外有名な戰書の尤物多數を網羅して一層讀者の興味感激を甚深ならしめんと勉めたるは、我日本は勿論殆ど世界萬國にも其比類を見ざる良著と稱するに躊躇せず、果せる哉本書を一讀せば、當時の英國大使館武官ベルネ井ツ男爵及佛國大使館武官ソマーヴィール氏、獨國大使館武官ベルタン大尉は何れも大賛辭を贈りて著者が多大の勞力に酬いられたり、寔に必讀の最好著なりと切に愛讀を冀ふ。

發行所　東京振替東京一〇一九二　東京市麹町區平河町二ノ一　宮本武林堂

豫告　七月刊行

戰史評論　**第十七回**（橋頭附近の戰鬪）

欠

戰史評論

大正三年八月(弓張嶺夜襲)

宮本武林堂發行

大正 3. 9. 1 内交

欠

戰史評論

成仁武夫補
無名戰士評

第十八回　弓張嶺の夜襲

第一軍は檜樹林、樣子嶺の戰鬪に於て大勝利を收めたる後、其右側たる本溪湖方面に對しては、大陽溝、老母嶺、千金嶺、福金嶺、北臺溝の線を占めてリユバウイングルレフ兩支隊の侵入を北に向つて警戒し。右翼は賈家堡子より西扁嶺、青石嶺を經て左翼下韓家堡子に至るの間に、第十二、第二、近衞の三個師團を並列して嚴重なる警戒をなしつゝ、寒坡嶺より弓張嶺、浪子山に亘れる陣地を占めたる、敵の東部兵團と相對峙して居たのであつたが。八月の六日になると當時滿洲軍總參謀長たる兒玉源太郎大將から遼陽攻擊計畫の要領の內報があ

つて、今後二週間内外の中に到著する諸團隊を待ち、滿洲軍は遼陽を攻撃するといふ極雄大なる計畫で。其大意を述ぶれば南方より第四軍、第二軍が先づ鞍山站に向つて前進運動を起したならば、第一軍は其方面にある後備兵の使用し得られる限り可成多くを都合して戰線に使用して、これと相策應して敵の東部兵團を攻撃せよといふのであつて。更に其攻撃が效を奏したならば第一軍は大安平、陽河沿に開進して、太子河の右岸を進んで遼陽の敵の右側背に迫れといふことまで示されてあつたのである。此の計畫は頗ぶる巧妙に企策せられ又頗ぶる適當に組織せられてあつたと評者は思ふ。

此の計畫要領を見た黒木第一軍司令官は、直ちに周到なる注意を以て自己の軍前にある敵情を判斷し、さて此の攻撃計畫と相對照して研究して見たる後速かに第二、第四兩軍を北進せしむるを有利として、其意見を大山元帥に上申して油斷なく攻勢移轉の準備をして居たが。一方敵は其左翼紅砂嶺邊に漸次に兵力を加へて、益〻其北方に力を用ゆるの狀況を現し來る所から。第一軍

司令官は此の横鋒り式の右側の敵が非常に氣懸かりてならぬので。八月十三日に於てこれが將來軍の前進に障碍を與へぬ樣に、第十二師團に命じて本溪湖方面の敵を掃蕩せしむることにして、愈〻八月十七日の拂曉を期して第十二師團に下した翌十四日、再び總司令官の攻撃に關する命令が到著して、その命ずる所は八月二十日には今現に自己軍の前にある東部兵團よりずつと後方に當る石咀子から腰四方臺附近に亘る敵の第二陣地を攻撃せよといふのであつて。此の我が軍に於て假りに敵の第二陣地なりと指定した、例の石咀子から腰四方臺に亘る間を二十日に占領する爲めには、少なくもそれより三日前には現在我が近き面前にある、寒坡嶺弓張嶺、浪子山に據れる東部兵團を攻撃破摧せねばならぬ。左すれば其前に本溪湖方面を攻撃して居る餘裕は殆んどない。てあるから急に十三日に下したる本溪湖攻撃の命令を撤回して、更に前面の敵を攻撃することに其計畫を變更して。東方面からは八盤嶺を境界とし

て其北方には第十二師團、其南方には第二師團を向はしめて攻撃を決行し。東南方からは近衛師團を浪子山の方に迫らしめて敵を此方面に牽制し。本溪湖の方には第十二師團から一部隊を出してこれを警戒監視せしむることにした。然るに八月十三日から愈〻滿洲雨季の大雨が降り出して、連日連夜篠くが如くに降りつゞけたものであるから、河川は暴かに漲溢を來して橋梁多くは流失し、交通運搬全く杜絶するに至つたので已むを得ずして攻撃を延期し。八月十五日には先づ其攻撃の部署を各師團に豫報し、一朝天晴れ水減ずると共に一擧に敵を粉砕せんと意氣込んだが、其攻撃計畫の梗概は實に次の如きものであつたのである。

第一軍攻撃計畫概要

一　第十二師團は七盤嶺より以北第二師團は弓張嶺及其西南山稜に向ひ、共に第一日勉めて多數の砲を以て攻撃を準備し、第二日拂曉に於て敵線を突撃し、近衛師團は二道河附近に進出して敵を牽制し、併せて軍の左側を掩

護す。

二　近衛師團より一聯隊の歩兵を控置して總豫備隊とし、第十二師團の砲兵一中隊山砲及若干の砲兵彈藥縱列を第二師團に屬し、第二師團騎兵の主力を近衛師團に屬す。

三　天候にして支障なくば二十日に於て攻撃を實施す。

此の攻撃の計畫が豫報せられてから後、第二師團は更に其攻撃の方法を變更したが、それは第一夜に高家溝東南一帶の高地を占領して、そこて敵と相對峙して翌日の夜を待ち、更に第二夜に於て敵陣地に本攻撃をなすの計畫であつたが、其考を以て種々地形を偵察したる結果、二日に亘るよりも一擧一夜に攻撃して仕舞ふのを得策として、八月十六日に至つて其意見を軍司令官に報告し。黒木司令官は此の兩師團長の計畫變更を是認して、其趣きを第十二師團に通報し、且つ明十七日に愈〻天氣になつたならば中一日を隔てゝ、十九日夜に於て攻撃を決行すべき豫定であることを豫め知らせて置いたが。愈〻

といふ十九日になつて又第十二師團から地形が夜襲には頗ぶる不便であるから、拂曉を以て猛烈に敵を攻撃したい。又此の攻撃間本溪湖の敵の方には、歩兵四大隊、騎兵一中隊、砲兵一中隊を配置し。師團の主力は寒坡嶺及び其北方に、又寒坡嶺、八盤嶺の間には其一部を向けて攻撃せんとするといふ報告を呈出したので、軍司令官は熟考の上これをも直ちに認可して。全軍夜襲の計畫が愈〻實際の夜襲をするものは第二師團而已と變更せられたが、まだ〳〵雨は容易に止むべき模樣なくして、遂に八月十八日の朝まで降りつゞけて仕舞たので。太子河、細河、藍河は勿論其他の小流細溪とも悉皆橋梁が流失して仕舞ひ兵站の輸送、軍隊の交通全く杜絶したのみか、各部隊間の連絡も亦多くは遮斷せられて仕舞た。で軍司令官は更に十九日に於て天候が漸次回復したならば愈〻二十三日を以て豫定の運動を開始することにして。それを各地に通報して各師團に其つもりで準備をなさしめて、且つそれ等の次第を漏らさず總司令官へ報告した。

此の山谷峻隘堅固を極めたる陣地を攻撃するに方つて、夜襲を用ひんとしたる軍司令官の計畫は頗ぶる適當である。若しも此の樣なる陣地を正々堂々と晝間眞面目に攻撃をしたならば、それこそ何程の犧牲を供せねばならぬか知れたものでない。而して此の攻撃の計畫は前述の通り決定してから、はからず夏季の大雨に遭遇して、一日一日と其實施を延期したが。これも亦一方からいへば此夜襲決行の爲めには非常に便利であつたといふのは、此の天氣の持ち直すのを待つ間に於て、各隊とも必死になつて敵情地形の偵察をやつたのであるから、第十二師團も第二師團も此の雨天の間に於て非常に地理に精通することになつたのである。これは實に彼の頼三樹が『落花雨是催花雨。一樣、檐聲前後情』と詠じたる如く、降雨が攻撃の實行を妨げると共に、一面に於ては此の降雨が又夜襲の爲めに多大な便利を與へてくれたのであつて、若しも此の六七日間に亘る大降雨がなかつたならば、此方面の夜襲は斯く都合よくは進捗せなんだかも知れぬのである。さて軍全體に關することは他日別

に研究することゝして愈これから本問題たる、第二師團の弓張嶺の夜襲に就て研究することにし様と思ふ。

十四日の夕に第二師團の參謀長を軍司令部へ招致して、これに授けたる所の軍の攻撃の計畫では。先づ第一日に於て前進を起して漸次敵に迫り翁家溝及び唐家堡子西方一帶の高地線を占領して、此の攻撃準備の陣地から十二分に砲撃を決行して敵を苦しめ。さて第二日の夜に於て合家堡子から高家溝の溪谷に此の師團を進めて、此所で十分に夜襲の仕度と手分けとをして、萬事萬端漏れなく準備したる後、猛烈果敢に弓張嶺から其西南方標高六三九高地迄の間の敵陣地へ、傍き眼もふらず突入するといふ手筈であつたが。第二師團長西中將は此の攻撃の計畫要領を受領したる後に於て、降雨の爲めに其攻撃が延引になつたので。其間に於て諸方面から敵情を捜索し地形を偵察して、軍の攻撃計畫の甚だ意に滿たぬ所を發見したので、兎に角二夜に於て攻撃するといふ軍の計畫を變更し、一夜に於て全く終了する樣にしたいといふ意見

具申をしたのであるが、此の意見具申に對しては評者は頗ぶる穩健至當なものであつたと思ふ。

嶮山峻谷の間に於て大兵を用ゆるのであるから、其多大の時間を費やすべきことを豫め顧慮して黒木軍司令官が、第一夜と第二夜に其攻撃を區分したのは用意周到てはあるが。一方夜襲といふものゝ性質の上から考へて見ると敵の不意に乘ずるのが肝要である、歩兵操典第二部第八十五に曰く

『夜襲ハ殆ンド歩兵ノ專任スル所ニシテ其奏功ノ要訣ハ不意ニ敵ニ肉薄シ銃剣ヲ揮ヒ一擧ニ決戰ヲ求ムルニ在リ(下略)』

即ち夜襲なるものは敵が此方面からやつて來るなと推察して、其準備で待ち受けて居る所へ向つて決行しては、多くの場合勞して功なきに終るものであつて、徒らに味方に損害を多大に生ずる位のことが落ちてあるから。第一夜に於て中途まで前進して此所で砲撃を猛烈に行なふといふやり方は、夜戰を以て此の陣地を奪略し樣といふ爲めには頗ぶる不利益てある。此の前夜の

我軍の前進の方向と其翌日の砲戰の砲擊點とを以て、敵は大略味方の夜襲せんとする地點から方向を感附いて。次の晩には其方面に兵力を集め防禦工事を堅固にして、これを待ち受けて居るといふことになるのは自然の勢である。これては到底夜戰の偉功を奏することは至つて困難てあると評者は思ふ。

單に敵にその夜襲の準備を前知せられるのみてはない、此の第二師團の攻擊すべき方面の山地には、三の山脈が重疊して其進路に横たはつて居るのであつて。其第一は西黄泥溝より上家溝に亘るものであつて、これは其山稜の線が敵の本陣地から約五千米突を距れて居るので、第一夜の占領線としては少しく遠きに失する。更に進むと合家堡子から唐子堡子に亘る第二の山脈が横たはつて居るが、これは敵の本線から約略二千米突の距離にあるのであるから、第一夜の占領線としては適當てあるが。此の山脈は敵陣地に比較して其標高が頗ぶる低いのであるから、全く敵本線から瞰制せられるの不利があるので、此所て無益に一日間敵の瞰射を頂戴しては全く馬鹿氣て居る。第三

に當る山脈こそ即ち敵の本線てある本陣地てあるから、第一夜に敵と對峙し得る如く第一山脈を占めたとすれば、砲擊も出來ねば勿論歩兵などは何もすることはない。進んて第二山脈を占むれば歩砲共に敵と火戰を交へて、其夜の攻擊を準備することは出來るが、其の代りには頭から敵の瞰射を頂戴しながら一日を此所に過ごさねばならぬ。

敵に我が夜襲し來るべき方向を推察されるのが大不利てある上に、更に地形が今申す通り頗ぶる第一日の夜に占領する爲めに、適當なる陣地がないとして見たなれば此の軍の計畫の、二日がゝりの夜襲は一見周到な用意の樣てはあるが、これは其實行の爲めには甚だ以て不利益てある。そこて十六日に於て一舉一夜に本陣地を奪取するの最も利益なる旨を上申して、其夜襲の計畫を變更したがこれは實に最も當を得たる改正てあつて、これありしが爲めに此の弓張嶺の夜襲は成功したと評者は信ずる。若しも前計畫の儘て第一日に高家溝東方高地を占領して、此所て一日間の攻擊準備をしたならば敵に瞰

制せられて散々に惱まされ、我が第二師團の攻撃の意氣を非常に沮喪せしむるのみならず。前の日から明白に我が夜襲の企圖を敵に推察されて仕舞ふから、到底此の夜襲の成功は覺束ないことになつたに相違ない。で此の場合に於ける西師團長の意見具申は誠に至當てあつて、それを是認したる黒木軍司令官の宏量も稱賛するに價するが、それよりも尚更に感心するのは其變更が大に夜戰の原則に合して居る所にあると評者は考へるのてある。

右の意見具申が是認せられてからも雨は遠慮なく降りつゞくので、其晴れるのを待つて居る中にいつしか二十日も過ぎて八月二十四日となつたが。それ迄の間毎日毎夜小部隊を敵前に放つて敵情と地形を捜つた爲めに、第二師團の諸隊は弓張嶺から其西南標高六三九高地迄の間に於ける、山谷の地形に精通したる而已ならず、敵の配備も大概呑み込んで仕舞ふたのであるから、第二師團の爲めには此の延期が如何に幸福と便利を與へてくれたか知れぬ。

『夜戰ニ在リテハ指揮官ハ百方手段ヲ盡シテ精細ナル計畫ヲ定メ成ルベク晝間ニ於テ各部隊長ヲ集メ之ニ命令ヲ下シ以テ諸準備ヲ爲サシムベシ(下略)』

とある通り、十餘日間の雨宿りに百方手段を盡して、精密に敵情地形を捜索して計畫を立て直して、殆んど熟地と同一になつた所で夜襲を行ふたのであるから、夜襲を決行するとしては此上もなき好都合好時機てあつたのである。そこで八月二十四日午前十時に於て西師團長は、其師團に對して大要左の如き夜襲に關する攻撃命令を下したのであつた。

一　歩兵第十五旅團(歩兵第三十聯隊本部及二大隊欠)は騎兵一小隊、工兵一小隊と共に二十五日日沒後西黄泥溝附近を出發し二十六日拂曉前弓張嶺及其南方約千五百米突の高地間に據る敵を攻撃すべし

二　歩兵第三旅團は騎兵二分隊と共に同日日沒後三道嶺西北標高四九五の鞍部及大後貝東北約二千米突の鞍部を出發し二十六日拂曉前弓張嶺鞍部南方約千五百米突の高地より其西方標高六三九高地間の敵を攻撃すべし

三　歩兵第三十聯隊(一大隊欠)は二十五日日沒前迄に三道嶺附近に集合し砲兵第十二聯隊第五中隊に續行し上翁家堡子南方に至り師團豫備隊となるべし

五　砲兵第二聯隊(第一大隊欠)は工兵第二大隊(一中隊欠)と共に二十五日日沒前迄に東黄泥溝南方に集合し歩兵第十五旅團に續行し翁家溝北方附近に放列を布置し同第十二聯隊第五中隊は同時三道嶺附近に集合し歩兵第三旅團に續行し標高五五五東北約千米突の高地附近に放列を布くべし

六　工兵第一中隊は二十五日日沒前三道嶺附近に集合し砲兵第十二聯隊第五中隊の行進及陣地進入を援助すべし

七　歩兵第十五旅團より一部隊を七盤嶺東南約二千米突に歩兵第三旅團より一部隊を周家堡南方高地附近に出し師團の兩側を掩護せしむべし

此の命令は概ね適當であると評者は思ふ、須く此の命令中て評者が少しく遺憾に思ふのは砲兵の位置てある、永々の滯陣中には定めし砲兵隊長も其陣

地の偵察に出かけ又其部下をも遣はしたのてあらふ。左すれば今少しましな陣地を占領することが出來なんだてあらふか。翁家溝の北方からは敵の本線迄は三千五百乃至四千米突ある、又砲兵第十二聯隊第五中隊の陣地から敵線までは二千米突以上あるから。何れも明拂曉に方つて攻撃歩兵に加勢する爲めに砲撃を始めるのには、餘りに距離が遠きに失するのみか、砲兵第二聯隊の陣地からは歩兵第三旅團即ち師團主力の攻撃點の方は砲撃することが出來ぬ。これは實に頗ぶる遺憾なる砲兵の配置てあつたと思ふのてある。よしや此場合山谷の爲めに此外に陣地が求められなんだならば、せめては今少し前方に夜中に於て、更に前進すべき豫定陣地でも選んて構築して置いたならば、明拂曉に於て如何に我師團の爲めに利益てあつたか知れぬと思ふのてある。山砲の方は位置は低いが高家溝附近には適當なる陣地が澤山にある、又野砲の方に於ても評者は合家堡子南方附近には、隨分適當なる陣地があつたてあらふと思ふのてある。然るに此の兩砲兵の陣地は何れも頗ぶる不適當てあつ

たが、思ふにこれは夜戰々々とそれ而已に意を傾むけ過ぎたので。豫め充分に砲兵の將校を派遣して其陣地の偵察をなさしめずして、愈〻二十四日に至つて概略の位置を師團命令で示したので。澤山に時日の餘裕のありしに關せず之が偵察を充分にしてなかつた砲兵隊長は、野戰砲兵操典第二部第二十八の

『夜間ノ陣地占領ハ過誤ヲ來シ混雜ヲ招キ易シ故ニ爲シ得ル限リ晝間豫メ周到ナル注意ヲ以テ偵察ヲ行ヒ諸準備ヲ整フルヲ要ス』

とある條文の示すが如く、明拂曉夜襲愈〻成功といふ瀨戸際の肝心要めといふ所で、何れに對しても充分の砲撃が出來ぬ樣な陣地を占めるに至つたのであつて、これは實に遺憾千萬の至りではあつたが。併し退ぞいて考ふると此の方面は山地險惡といふ所から、砲兵は到底使用が困難であると考へて、其一大隊を他の師團へ譲り遣はしたる樣な次第であつたから。全く地形の爲めに制限せられたのであらふけれども、それにしても今少し何とかして二十六日早朝の爲めに敵を苦しめられる樣にして置きたかつたと評者は殘念に思ふ

のである。

此時の第一軍の攻撃に方つては、此の第二師團の方面が一番に地形が險難であつたのであるから、それが爲めに第十二師團から山砲一中隊を特にこれに屬したのであるが。評者は軍司令官がそれ迄の考があつたとしたならば、今一歩を進めて何故に半端になつた野砲第十二聯隊の第二大隊(一中隊欠)と、砲兵第二聯隊第一大隊と交換して、それを兩旅團の進路に一中隊宛進めなんだのであらふか。固より猥りに建制破壞を行ふのはよろしくないけれども、第十二師團の進路には立派な大道が通つて居るから其砲兵の半分位が野砲であつても決して支障はない筈である。からしてそれに野砲二中隊又は一大隊を與へて、それから此第二師團へ山砲二中隊を派遣せしめたならば、此夜襲には非常に都合がよかつたに相違ないのである。それを弓張嶺に通ずる爲の險惡なる山道に野砲一大隊を引き込んだので、砲兵を待つて居たといふのは名ばかりて、歩兵第十五旅團方面は全く聊かも其恩惠に浴し得なんだ。これ

實に如何にも殘念なことであつたのであつて、一中隊を交換するも二中隊を交換するも第十二師團には決して痛痒を感ずることなく。之に反して第二師團には非常に利益を與へるのであるから、これは軍司令官に今少しく英斷をしてもらいたかつた。若しも此の師團に二箇以上の山砲中隊があつて、それが二道に分れて歩兵に隨伴して大に奮闘したならば、歩の第三旅團の左翼に於ける敵の頑強なる抵抗が決して翌々日の正午迄も繼續する樣なことはなくして。確かに此の夜襲は今一段の光輝ある勝利を收め得たに相違ないと評者は思ふ次第である。

砲兵のことを除いては此の攻撃の命令は、大體に於て至當に出來て居ると思ふのみか、其實行が頗ぶる綿密に注意周到に實施せられたのであるから、先づ〳〵此の命令と殆んど同樣に夜襲は實行せられて居るのである。隨て此の外には評者は此の命令には申分はないのであるが、何故に今少しく其砲兵の使用方に就いて研究して置くことを怠たつたかと、それを非常に殘念にも

思ひ又た不思議にも思ふ次第である。先づ砲兵はこれ丈けにしてさて今からは更に各旅團の夜襲實施に就て、詳細に研究することにし樣と思ふが。研究するにも便利であるから戰史記載の通り右翼隊たる第十五旅團の方から順々に研究してゆくことにしたいと思ふ。

此の師團の右翼隊は歩兵第十六聯隊と歩兵第三十聯隊の第二大隊に騎兵一小隊と工兵一小隊を加へたものであつて、其指揮官は當時歩兵第十五旅團長たりし陸軍少將岡崎生三故中將閣下であつたが。彼は其旅團を八月二十五日の午後七時迄に豫定の如く、王家堡子北方千五百米突の無名村の東北に集合せしめて、其所で左の如く夜襲の計畫の準備をした。

一　歩兵第十六聯隊、工兵一小隊は第一線となり午後十一時三十分出發二十六日午前五時を期して弓張嶺より其南方千五百米突の高地に據る敵を攻撃すべし

二　歩兵第三十聯隊の第六中隊は午後十時出發七盤嶺東南約二千米突の高

地を同第五中隊は午前十時三十分出發翁家溝西方高地を占領して旅團の開進を掩護すべし

三　歩兵第三十聯隊第七、第八中隊及騎兵小隊を以て旅團の豫備隊とす歩兵第十六聯隊に續行、翁家堡子西方高地に位置すべし

此の旅團長の處置は極めて適當であつて評者も何等のいふべきことはないさて愈〻午後の十一時になると歩兵第十六聯隊長谷山隆英大佐は、其第二大隊（第五、第六中隊欠）を同大隊長加藤丈少佐に率ゐしめ先行して啞叭嶺子に到り聯隊の開進を掩護せしめ。少しく間を置いて爾餘の諸隊は此の道路を啞叭嶺子に向つて前進を始めたが、此の旅團が敵前約千米突の啞叭嶺子附近に其旅團を開進する爲めに、右方七盤嶺東南約二千米突の高地に一中隊を出して。既に師團命令にあつたる師團の右翼を掩護せしむると共に、旅團の開進の爲めに寒坡嶺七盤嶺方向を監視せしめ。更に左方翁家溝西方高地に一中隊を出して旅團の開進に對して其左翼を警戒せしめ。此兩中隊は何れも道路を離れて

夜中遠く前進するのであるから、それを歩の第十六聯隊よりは早く出發せしめて。さて其後に歩の第十六聯隊の第七、第八兩中隊を本道より啞叭嶺子西方約五百米突附近迄進ましめて、前方三箇所に四箇中隊を配布してそれが殆んど同時に其命ぜられた地に到著する如く時間をはかりて出發せしめ、旅團の啞叭嶺子から合家堡子附近に集合する掩護に任じたのは、最も適當なる處置にして其秩序が如何にも整然として一點の非難すべきものがない。斯くまで手筈が巧に暗夜中に於て出來たといふのは、畢竟するに雨天の爲に時日に餘裕を生じて、此邊の地形に上下ともに精通するに至つたお蔭であつて、爲に夜戰の要訣たる精細なる計畫と綿密なる諸準備がちやんと整頓したのである。から、此戰鬪の勝利はこれだけを見ても實に疑ふべきものはないのである。

加藤少佐が旅團の進路を其第七、第八中隊を率ゐて先行して行くと、其途中で左方へ派遣された第三十聯隊の第五中隊が、敵の警戒兵と衝突して居るのに出會したので、これと協力して速に其敵を擊退して急進して。同少佐は今

一度敵の小部隊を撃破しこれを驅逐しつゝ、二十六日午前一時頃啞叭嶺子西方五百米突の、弓張嶺に通ずる本道上の要點を占めて停止し。此所に聯隊の開進に危害を及ぼさぬ様に、嚴密を極めたる警戒をして近く千米突内外の山上にある敵を監視した。谷山大佐は其聯隊を極めて靜肅に少しも敵に氣取られぬ様に啞叭嶺子の西側に開進せしめて、第一大隊を右翼第三大隊を左翼としてこれを第一線として第五、第六中隊を第二線として其直後に備へた。そこで第一大隊は其大隊を併立縱隊の重複縱隊とし。又第三大隊は中隊の橫隊を四箇前後に重疊したる閉縮大隊の隊形を採用し、第二線の第五、第六中隊は縱隊橫隊を成形して、弓張嶺東南千五百米突の高地を目標として、足音一つ咳一つにも氣を著けて枚を銜んで前進を起さんとしたのは、正に二十六日午前二時三十分前後であつたのである。丁度此時旅團長は其豫備隊に例の翁家溝西方高地に出した任務終れる掩護隊を收容して歩兵三中隊と騎兵一小隊を握つて谷山聯隊が目標としたる高地に近き合家堡子に向て、道路を離れて西南

方に前進しつゝある最中であつたのである。

此の谷山聯隊の第一大隊は其進む方面が稍〻複雜なる地形であつたので、それを併立縱隊として運動をなし易くした而已か、それをまた距離間隔を開きたる重複縱隊として、少しの方向を間違へた位では各中隊が衝突や錯雜を生ぜぬ様に計畫したのは至當であり、又第三大隊は其進路が稍〻廣き山の稜線を傳ふことになつて居たので、中隊面の閉縮大隊としたのも最も適當であつて其後方に谷山大佐が近く第五、第六中隊を中隊縱隊としそれを橫列して跟隨せしめたのも申分はない、これ實に歩兵操典第一部第百八十四の

『夜間ノ攻撃運動ハ特ニ靜肅ニシテ連繫ヲ保チ確實ニ行進方向ヲ維持シ敵ニ接近スルヲ主要トス之ガ爲勉メテ單一ナル隊形例ヘバ密集隊形ニ在ル中隊ヲ併列シ又ハ重疊セルモノヲ用ヒ(中略)近ク豫備隊ヲ隨ヘテ前進シ(下略)

中隊ハ行進ノ爲ニハ側面向ノ隊形ヲ用フルヲ便トス(中略)然レドモ突撃ヲ實施スル爲ニハ正面向ノ隊形ヲ用フルヲ可トス(下略)』

とある諸條項を遵奉して夜襲を準備したものであつて、斯くの如き頗ぶる合理的なる方法を以て漸次敵に接近して、午前四時敵陣地前の突稜部に達せんとしたが。こゝて敵の下士哨の射撃を受けたので直に之れを驅逐して、其勢に乘じ此の後退する敵に尾して本陣地に迫らんとしたが。此の下士哨の射撃の爲めに注意を喚起したる本線は、非常に猛烈なる射撃を此の夜襲隊に向つて注いだので忽ちにして其死傷は實に少なからぬことになつた。丁度此時頃に第二大隊の第七、第八中隊は其掩護の任を終つて、漸次其隊を旋廻して敵の左翼に迫り、豫備隊も亦第一線に增加したので、歩兵第十六聯隊は全隊を一線にし暫時停止して月光により近距離より敵に向つて、頗ぶる猛烈なる射撃を行ふたる後。全力を擧げて猛烈果敢に敵の堅固なる陣地に銃劍突撃を强行して、一擧に敵を西北に擊退して此の方面を確實に占領したのは、正に二十六日の午前五時頃であつたのである。

此の歩兵第十六聯隊が敵の射撃の爲めに、一時全線が停止して月光により

てこれに應射して、さて喊聲を揚げて敵陣中に突入したのはこれ實に甚だ至當でなかつた。夜襲部隊は敵の射撃を受けたならば其損害を避ける爲めには一時靜止するのが最も得策であつて、それは歩兵操典第一部第百八十五に

『行進中敵ノ有效射撃ヲ受クルカ又ハ火光ニ依リ探照セラレタルトキハ其效力及注意ヲ減殺スル爲一時靜止スルヲ可トス然レドモ之ガ爲成ルベク前進運動ヲ澁滯セシメザルコトニ注意スベシ』

とある通りであるが、何故にこれが惡るいかといふと、此の應射を始めると隨て時間を徒費し我位置を敵に明らかに知らしめ、其兵力の多寡をも其攻撃の方向をも早く敵が推知して仕舞ふことになるから、非常に味方の爲めには不利である上に損害も隨て夥たゞしいのは事實である。又喊聲を發するのもこれと同樣の理由の下に、決して夜襲の爲めには利益てないのであつて、默々として眞黑な敵兵が潮の如く攻め寄せて、それが明皎々たる銃劍を揮つて縱橫に刺突するのを見ては。敵は其如何なる兵力と如何なる勇者が進來し

たかを計り知り難く、全く度を失なつて潰走するに至るものであつて。愈〻敵が全然潰走に陥つたならばそこで始めて大喊聲を揚げて、其退却する所を射撃を以て追撃するのである。即ち敵を陣地から驅逐したる後に於ては、喊聲も射撃も支障はないけれども。敵前咫尺に於てこれを行ふのは實際非常に不利益である。若し此の旅團の夜襲も此の射撃と喊聲とを發せなんだならば、評者は其死傷數を大に減少し得たに相違ないと思ふのである。此の樣な失策は實にこれまでに內外古今何度くり返されて居るか知れぬのであるから、何卒青年將校諸君今後の戰役の夜襲に於ては、十二分に此の無發射無喊聲主義を嚴守する樣に、平常から充分の修養を自己はもとより其部下にもよく〳〵實地の演習に於て有慣的に敎育して置かれんことを切望に堪へぬ。

斯くいふものゝ此の旅團の夜襲は、頗ぶる秩序整然と實行せられたので、可惜(あたら)勇士は隨分澤山に失なつたけれども其結果は實に立派なものであつて。日露戰役中此の旅團の夜襲の如く立派に規律正しく行なはれて、且つそれが

弓張嶺ノ夜襲

筆伯畵道白原石人道九十九

一擧に奏功したのはこれが實に一等と稱すべきものであつた。これを要するに岡崎旅團長が前進其他の準備に就いて操典の規定を嚴守して、其第一部第百八十四同第百八十五の示すが如く計畫し。且つ其部署に方つては操典第二部第八十五の

『夜襲ノ部署ハ決戰ニ必要ナル兵力ヲ最初ヨリ第一線ニ備ヘ各部隊ヲシテ勉メテ集團セシムルヲ要ス(下略)』

とある原則に則とり、其二中隊を豫備としたる外全聯隊を第一線としたのが、抑〻此の成功を持ち來したる大原因であつて。兎にも角にも此の旅團の弓張嶺の夜襲は殆んど模範的のものと稱するを得べく、此夜戰は實に岡崎將軍一生の中の花であつたといふを評者は憚らぬのである。そこでそれでは左翼隊たりし歩兵第三旅團は如何にといふと、それはこれから項を變へて更に詳細に研究して見樣が、聊か、いや甚だ其實行は此の旅團よりも不充分であつたのは事實てある。

歩兵第三旅團は當時松永正敏少將故中將がこれを指揮して、其歩兵第四聯隊は二十五日午後八時三道嶺西方標高四九五高地の鞍部を出發し、上翁家堡子附近に集合して更に高家溝に向ふ準備をなし。又歩兵第二十九聯隊は同日同時刻に大後貝西北約二千米突の鞍部を出發して、唐家堡子東南附近に集合して更に高家溝へ向ふの準備をする都合であつて。これが爲めに兩聯隊は同日午後七時に於て右の兩鞍部に集合し、歩兵第四聯隊からは右方道路と中央道路とへ各一中隊、更に其左の標高五五五の高地へ小野萬龜太少佐に二中隊を率ゐさして派遣して、高家溝東方高地にある敵の警戒隊を驅逐して、我が旅團の上翁家堡子と唐家堡子へ開進するのを掩護せしめ。歩の第二十九聯隊からは師團命令で示されたる左方周家堡東南高地へ第五中隊を、又左方道路即ち標高五五五高地の小野少佐の向つた右の高地へ第十二中隊を出して第五中隊には師團の左側背を掩護せしめて、第十二中隊には旅團の開進を掩護せしめた。此の高家溝に通ずる各山徑に一中隊を進め、更に其左の敵が常に占

領して居た標高五五五高地には、幾分手剛き敵のあるべきを豫想して小野少佐の二中隊を向かはしめて、更に左方に一中隊を派して師團の左側背を掩護すると共に、旅團が上翁家堡子の谷地に開進するのを掩護せしめたのは、頗ぶる適當なる處置であつたと考へるが。こゝに少しく評者が不思議に思ふのは何故に標高五五五高地の敵を擊攘するの爲に、歩兵第二十九聯隊の一部を使用せずして、態〻遠くから歩の第四聯隊の小野大隊を之れに向はしたのであるかといふことて。左なきだに夜戰に於ては部隊の錯雜混淆を生じ易いのにそれに左の隊の左方の高地の敵を追ふ爲めに、右の隊から一部隊を出さしめたといふのは求めて紛糾の原因を作つた樣なもので、これ實に甚だ不審千萬なるやり方であると思ふ。評者の考では右方道路と中央道路を歩兵第四聯隊の一中隊宛て掩護せしめ、左方道路と五五五高地とにはこれを歩兵第二十九聯隊から兵を出させる方がよいと思ふ。左すれば混雜を生ぜぬのみてはない更らに夜襲を決行するに方つてこれ等の掩護部隊を收集して、確實にこれを聯

隊長の手中に握るにも時間を要せず、又無益なる遠路を運動するの勞を省くことも出來るのであるが。これ位のことは松永少將決して氣著かぬことはない筈であるが、それを態〻小野少佐に此の任を負はせたといふのは、或は此の大隊が旅團の豫備隊であつたからかも知れぬがそれは理由が薄弱である、戰史には何も記載してないけれども多分此の大隊が前に此の五五五地の方に派遣されたこともあつて、此の方面の地形に精通して居た爲めに、此夜間に於て其目的地を間違へることのない様に、多分此の小野大隊を用ひたものであつたらふ。左すれば毛頭評者に於て不同意はないのであるが、歩の第二十九聯隊が右方に居るのをさし措いて、態〻其右の方より遠く小野少佐の二中隊を第四聯隊から派出して、此の標高五五五高地の敵を掃蕩して旅團の開進を掩護したのは、如何にも不穩當に見へるのでそれで一言した次第である。

少々の缺點は咎めずして此の最も適當なる兵力を使用せられたりと評者の評したる、歩兵第三旅團開進掩護の各隊は何れも命令の方向に前進して、午

後十一時より夜半迄の間に於て何れも若干の敵の監視兵を驅逐して、高家溝東南高地一帶を確かに占領して、旅團の開進を掩護し。歩兵第四聯隊は此の掩護によりて午後九時三十分前後に於て上翁家堡子南方附近に開進し。又た歩兵第二十九聯隊は大後貝西北の鞍部を出發して、道路の都合て上翁家堡子南方を經て、唐家堡子東端附近に開進したが。此の旅團が其夜襲に方つて部隊の混淆と連絡の斷絶を恐れて、先づ此の敵本陣地と一山脈を隔つる所の上翁家堡子から唐家堡子の線に於て、一度其兩聯隊を開進して其連絡秩序を恢復して。更に高家溝谷地に向つて前進して、又こゝで其隊伍の整頓を正し秩序連絡の斷絶せぬ様に計畫したのは。少しく徒らに時間を消費するの傾きがないでもないが、併し用意周到計畫綿密にして夜戰に於ては、斯くするのが最も適當なる處置のし方であると評者は思ふ。松永少將は此の第一の谷地に於て兩聯隊の隊伍を整頓して、さてそれから其前方の山脈を越ゆるに方つてはこれを三道より進ませることにした。即ち

一　右方道路《上翁家堡子―高家溝點線路》には、歩兵第四聯隊第二大隊の二中隊と第三大隊、即ち同聯隊の主力を進めた。

二　中央道路《上翁家堡子西南千米突より高家溝に通ずる點線路》には歩兵第四聯隊第一大隊を進ましめ、更に其後方から歩兵第二十九聯隊の一部をこれに續行せしめた。

三　右方道路《唐家堡子高家溝兩點線路》には歩兵第二十九聯隊の主力を進ましめた。

以上の如く旅團は三道を採つて高家溝谷地に向つて、二十五日夜半頃に運動を起して極めて靜肅に前進をしたが。其三道は何れも殆んど鹿蹊樵徑に過ぎぬ程のかたばかりの細道であつたものであるから、各縱隊ともに殆んど一列の側面縱隊になつて仕舞て、一大隊の長徑が無慮一千米突以上に延伸するといふ騷動、爲に非常に時間を費やしたけれども、上下一同熱心に其連絡に勉めた爲めに、殆んど些の混雜をも生ずることなく豫定の如く高家溝の村落

を中央として兩聯隊は正しく開進を終り。此間掩護に任じたる各隊は其任を終つて原隊に復歸したので、更に小部隊數箇を前方に近く派出して警戒せしめて、旅團は此の高家溝に於て上下何れも輕裝して其不用品を悉く高家溝に集積し、愈〻これから前方僅かに千米突内外の山上に控へて居る、敵の本陣地に向つて突進せんと意氣込んだのである。

此の高家溝に道路が四本集まつて居る村の中央の所から右方には、歩兵第四聯隊が右に第三大隊左に第一大隊を置き、これを第一線として其兩大隊から第四、第九の二中隊を取つて、これを其後方に聯隊の豫備として第二線に備へた。其稍〻後方には同聯隊の第二大隊が全部集まつて旅團の豫備となつて居る。即ちこれが此の旅團の右方聯隊の部署であつて。更に其左には歩の第二十九聯隊が其第三大隊を右とし第二大隊を中央とし、第一大隊を左翼として横列して開進した、これが即ち左翼隊たる歩兵第二十九聯隊の部署であつたが。此の聯隊からは第五中隊を周家堡へ出してあるので、中央に位置した第

二大隊は結局二中隊を第一線となし、其殘りの第七中隊はこれを聯隊長が其豫備として自から掌握して居たのであつて。歩の第四聯隊は六中隊を第一線とし二中隊を第二線とし、歩の第二十九聯隊は十中隊を第一線とし一中隊を豫備として第二線に控置したのである。而して此の松永旅團は結局合計一線に十六中隊第二線に三中隊第三線に四中隊といふ部署をしたのであつて。これ實に『決戰ニ必要ナル兵力ヲ最初ヨリ第一線ニ備ヘ云々』といふ、歩兵操典の要領と全く吻合して居るのであるから、自分は此の部署は大に合理的で適當であつたと考へるのである。

此の旅團の部署が終つたのが最早彼れ是れ二十六日の午前三時前後であつたので、午前三時五十分愈〻其左隣りの歩兵第二十九聯隊と連絡して、歩兵第四聯隊第一大隊は高家溝の北方の谷地を傳ふて四列側面縱隊を以て前進を起し。同第三大隊の板橋少佐(現大佐)は午前四時十五分第一大隊よりは少し遲れて、其左方の高家溝東北の谷地に向つて矢張四列側面縱隊で運動を起した。

そこて歩兵第四聯隊の豫備たる第四、第九の兩中隊は第三大隊の後方に跟隨したが、其中に歩の第二十九聯隊の方ては烈しき銃聲が起り、それに誘はれて我が歩の第四聯隊方面ても前面高地から敵の射撃が開かれたが。沈著せる各大隊は少しもそれに頓著せずして前進を續けて、第一大隊は敵前餘り遠くない所に於て其隊形を變換して縱隊となり、午前五時頃敵線に突入してこれを西方谷地へ擊退し。次て板橋大隊も同樣途中に於て縱隊橫隊となつて、殆ど同時刻頃に敵の本線に突入したが。此の兩大隊の突入するより以前に於て、敵は此兩大隊の中間にある急峻なる突稜の上に、百餘名の決死の一部隊を殘して頑強に防禦せしめた爲に、兩大隊ともこれから烈しき側射を受けて、少なからざる損害續出容易に前進が出來なんだ。後方よりこの危機を見たる松永旅團長は何として猶豫して居らふや、直ちに其旅團の豫備たる歩兵第四聯隊の第二大隊の三中隊を併立縱隊の橫隊として兩大隊の中間に進め。猛烈果敢傍き眼もふらず前進せしめて、此の決死の百餘名の敵を驅逐したので、そ

こて始めて第三、第一兩大隊は敵本線へ向つて突貫することが出來たのである。此所て一つ評者が不審に思ふのは此の聯隊の豫備たりし第四、第九の兩中隊の動作てある。此の第二線二中隊は第一線が悉く敵陣に突入して仕舞てもなほ遠く後方に控へて居たが、此の方面は可なり敵の頑強なる抵抗を受けたのてあるから、此の聯隊の豫備隊はずつと以前に第一線に增加すべきてある。又た前揭の例の兩大隊の中間に居た百餘の敵の如きは、旅團長の手を煩す迄もなく此の豫備隊が速に中央に增加して、直ちに驅逐すべきが至當なる處置のやり方てあると評者は思ふ。然るに此の聯隊豫備は何の爲すこともなく、既に敵線奪略の後迄も悠々閑々依然として其後方の山の中腹に控へて居た。これ實に無能千萬なる處置てあつて、評者は頗ぶる至當ならざる行動てあると考へるのてあるが、此時丁度此の聯隊長吉田貞中佐が運拙なく戰死して居るのを見ると、多分それが此の豫備二中隊を巧みに否々普通に使用し得なんだ原因てあつたかも知れぬが。聯隊長が戰死すればそれに代つて指揮を取るべ

き大隊長もある筈てある、よしそれは暗中咄嗟の場合且つ混成の兩中隊てあるから烈かつたとしても。兩中隊長が協同して第一線に速に加勢するか、又は中間地區に頑張つたる敵を驅逐する位のことは是非せねばならなんだと思ふ。然るに其れより後方の旅團豫備の第二大隊が此豫備隊をのり越して出て來てこれを驅逐しても、尙ほ且つ此の兩中隊は平氣て何もせずに袖手して後方に控へて居たのは、これは實に餘りに現在の狀況に適當せざる處置ではあるまいか。これ蓋し聯隊長が第一線大隊より一中隊宛を取つて、其豫備隊を混成した爲めに聯隊長の戰死と共に、此の寄り集まりの兩中隊長は何と處置してよいやら一切方角がたゝなくなり。無暗に過早に前進して聯隊の豫備を皆無にしてもなるまいし、又去りとて此場合默つて停止して居ることも出來ぬので處置に窮して、まご〳〵して居る中に、旅團豫備の第二大隊は逸早く も進んて第一線右翼に連なつて敵線に突入して仕舞たといふ樣な次第て。終に此の二中隊は夜戰の肝心要めといふ場合に、何等の爲すこともなくして躊

踏逡巡して仕舞たものと見るのが至當てあつて、これ實に評者が常々口癖の樣に唱道する所の建制分割の持ち來たせる失態てあらふと思ふのは決して間違いてはないと思ふ。斯くして一度は敵の逆襲にも出合ふたが大隊長以下非常の犧牲をものともせずして奮闘せしめ、くり返し〳〵堅忍不屈に行ふたる突撃が終に效を奏して、兎にも角にも此の附近の敵の陣地を辛ふじて占領し得たのてある。

戰史の上ては第四、第九兩中隊は、第三大隊の突撃と共に之に加はつて突撃し樣としたが地形が急峻て其意を遂げなんだから、これを中止したが其間に聯隊長吉田中佐が戰死したと記述してあるが。如何にもそんなことてあつたのてあらふが、それにしても此の兩中隊は甚だ無能てあつて機動心が少しもなかつたと評者は思ふ。旅團の豫備隊たりし第二大隊は一度兩大隊の中央稜線上の敵を驅逐して、第一線兩大隊の前進の大障碍を除いた上に、更に右方に轉進して第三大隊の右翼に連繫突進して、敵の陣地を占領して居るてはな

いか。それに何ぞや地形陰惡傾斜急峻てあつたといふて、べん〳〵として後方に構へて居るとは氣樂にも暢氣にも程がある、若し其向つた方が險峻であつたならば何故に此第二大隊の占領した方へ轉進して第一線に出なんだのてあるか。これ併しながら統一指揮する人のない混成の兩中隊は、これを今まて握つて居た吉田貞中佐の戰死と共に、全く其活動力を失つて仕舞た爲めてあつて、其原因は確に建制分割から生じて居ると評者は信ずる。てあるから何れの場合ても此の建制の分割は大に注意をせねばならぬ、但し此の場合に吉田中佐が各大隊から一中隊を取つたのは、これ實に萬々已むを得ぬ場合てそれは決して不當てはないけれども、其不當てない處置てさへも自己の戰死と共に全く此の二中隊を、無益に後方にごろ附かせることになつて仕舞たのは、其原因は全く寄り合ひ出來合ひの豫備隊てあつたが爲めてあるから。何れの場合ても出來得る限りは此の建制を分割せぬ樣に部署するのが、軍隊運用部署上の大肝要なる要訣てあると評者は信ずるのてある。

此の旅團の左翼隊たりし步兵第二十九聯隊は如何にしたかといふと、此聯隊は其第三大隊を最先頭として、其第九中隊を高家溝直北の步の第四聯隊の第一大隊の進んだ谷地の西側に沿ふて進ましめ。其山稜を一つ隔てたる同地西北の谷地へ第十中隊を進めて、第十一中隊を其後方に豫備として午前三時十五分頃前進を起し、第二大隊(第五、第七中隊欠)は其後方に續行した。又第一大隊は其左方の高家溝西方の山稜を越えて旅團の最も左翼となつて敵に近づいたが。其各隊の出發時刻が適當に加減調節せられなんだので、行進極めて困難なる喜入少佐の第一大隊が、山の稜線を越えてまだ豫定の谷地へ開進し終らぬ中に。氣早の第九、第十中隊は比較的進路がよいので最早敵に衝突するといふ次第であつたので、隨分と兵力の大なる大威壓を敵に加へられる實力を持ちながら、それを殆んど各箇各別逐次增加的に使用するといふ失態に陷り。且つまだ全隊一度に攻撃を開始するといふ約束の時間よりは、殆んど一時間近くも早いのに敵の射撃を被むるに至り、最早此の場合猶豫して居るこ

とが出來ぬといふ破目になり、他隊などには頓著することなく豫定の時間よりもずつと早く第九、第十兩中隊は併立縱隊又は中隊縱隊で敵に突撃して、其後方から第三大隊長林少佐は第十一中隊を率ゐて、高家溝西北の谷を傳ひ眞つ北に向つて急進したが、これ實に此の方面夜襲の容易に進捗せざるの因を作つたものである。抑〻夜戰に於ては其兵力の大部分を最初から第一線に備へそれを堅固に引き纏め統一して一度にどつと突入せねば效能がないのである然るに此の聯隊は兵力からいへば第五中隊が缺けて居たばかりで、十一箇中隊を有して居りながら各大隊の連絡が不充分であつたのと、先に進んだ第九、第十の兩中隊が敵の有效射撃を受くると共に、忽ち夢中になつて仕舞て他の兩大隊のことなどには少しも頓著せずして、約束の時間よりもずつと早く孤立突撃して仕舞たので。左なきだに暗中の前進に苦しんで居た、第一、第二兩大隊は其戰聲に氣を焦らつて駈け出したものであるから。愈〻隊伍の混雜紛糾を加へるといふ大不利を招き。遂に夜間に於て其の前面の敵を充分に擊退

し得ざる様なる不手際に陥つて仕舞たのは實に殘念千萬てある。歩兵操典第一部第百八十五にもある通り

『行進中敵ノ有效射撃ヲ受クルカ又ハ火光ニ依リ探照セラレタルトキハ其效力及注意ヲ減殺スル爲一時停止スルヲ可トスルコトアリ〔下略〕』

第九、第十兩中隊が他隊より後れた場合ならば兎に角、現に他隊より一番先に進んて居てまだ豫定の一擧突入の時間に達せなんだのてある以上は。此の兩中隊長は此の操典の條文を守つて一時靜肅に停止して忍んて他隊の進出を待ち、敵が其射撃をゆるめると共に我が友軍が前進し來るといふ機會を察して。百方力を盡して相協同して大々的の大突撃を敵の正面に決行したならば如何に頑強なる敵なりとも到底一支も堪へられなんだに相違ないのてある。それを敵の射撃の爲めに忽ちにのぼせあがつて仕舞て、後續部隊のことも何もかも打ち忘れて、過早に敵中へ突入して仕舞たので頗ぶる其突撃の效力が薄かつた爲めに、敵は終に陣地の一角を死守して容易に退却し様とせぬ。斯

くて此の聯隊は其夜間の突撃を、たしか前後三回位に決行するといふことになつたので、敵は各別に其突撃を引き受け頗ぶる頑強にこれに抵抗して、非常なる苦戰を繰り返した後午前五時半頃に至り、漸くにして一先づ敵を山下へ驅逐したが。此の聯隊の行動は前に述べたる如く夜戰の原則に背反したる而已か、同第二部第二十の

『戰鬪ヲ實行スルニ方リ所要ニ充タザル兵力ヲ逐次ニ戰線ニ增加スルハ大ナル過失ニ屬ス此ノ如クスルトキハ絶エズ寡兵ヲ以テ衆敵ト戰ハザルヲ得ズ云々』

といふ原則にも乖戻することになつたのてあつて。此方面即ち此の弓張嶺の夜襲の最左翼隊方面が、其戰鬪の進捗意の如くならずして、終に翌二十六日の晝間になつても苦戰をせねばならなんだのは。他にも其原因はあらふけれども其大原因は、此の兵力逐次增加的の夜襲の不統一實行が、最も大なるものてあるのは疑ふの餘地がないのてある。

これは事後に至つて其夜襲の稍〻不結果であつた所から、此の旅團の攻撃法の不當を鳴らす樣て少し酷に聞へるかも知れぬが。此場合此の松永旅團の受持ちたる攻撃方面は、隨分と其正面が廣くして三四千米突に亘つたのであるから。それを二箇聯隊足らずの兵力で攻撃するのは實に困難てあるけれども地形も數日前から既に相當に詳しく偵察してあつた以上は、評者の考へる所ては此の旅團の右翼を今少し南によせ、高家溝の東北端に其突角を延して居る、兩點線路二條の間に挟まれたる突稜に限つて仕舞い、それから北は右翼旅團に委した方がよかつたと思ふ。つまり此の突稜以北右翼旅團の攻撃點以南の中間地區は、其左右に隆起したる高地があるのてあるから、此の兩高地を占領して仕舞へば此所から瞰制的の十字火を行なへるので、到底永く持ち堪たへることは出來ない所てあるから。此の中間の比較的に標高の低い山脈の一部を除き、其代りとして毛石溝南方高地即ち現在の左翼隊の左翼より、谷を一つ隔てたる翌日晝に至り我左翼隊を苦しめたる爲めに、師團豫備たる

歩兵第三十聯隊の宮川高草木兩大隊を使用して攻撃したる、あの高地迄を此の左翼隊て攻撃したならば。高家溝西北高地而已に多數の軍隊が蝟集して敵の縱射や背射に困難する樣なことともなく、此方面も必ず拂曉と同時に占領し得て、隨て標高六三九高地の敵もあれ程頑強に抵抗し得なんだてあらふと評者は考へる。岡目八目て濟んだ跡から勝手な熱を吹く樣てはあるが、此の場合此の旅團の攻撃方向は確かに少し右に偏したと評者は思ふのてある。此の松永旅團の右に偏より過ぎた爲めに左方に殘つたる敵陣地の一部は、翌日に至つても容易に退却せずして、頑強に我が殆んど成功したる夜襲隊を苦しめ。師團長は非常にこれを危險なりとして、師團豫備の全力を盡して之を攻撃したけれども、終に午後の三時過ぎ迄も敵は强硬至極に此の方面を頑守して、我が左翼隊に慘々酷々の損傷を與へたのは、要するに松永旅團の攻撃方向が右に偏したから生じた災いてあると評者は信ずるのてある。

話が少しあと戻りをするが、此の左翼隊の最左翼に向ひたる喜入大隊の第

三中隊は、大隊が開進地に到著するかせぬかに敵の射撃を受けたので、ありがちなことてはあるが暗中自然に戰聲の烈しい方に牽きつけられて仕舞て。自己大隊の向ふべき方面たる北方には向はずして、過早に戰鬪を始めたる第九、第十中隊の戰聲の方に赴き、全く方向を間違へて東北方に向つて突進したこれは最も甚だしい方角違いの方に向つた一例てあるが、其他の此の大隊の三中隊も過早の戰聲に迷はされ牽きつけられて、自然〳〵と皆なて右によつていつた爲めに終に左方に大なる敵を殘すに至つたのてはあるまいか。或は全體に此の歩の第二十九聯隊は、彼の第九、第十の先進二中隊の過早の戰聲がなかつたならば、其戰線が今少し左方へ延びる都合てあつたのではあるまいか、或は實際如斯てあつたのであらふと評者は考へるのである。詮ずる所歩兵操典第一部第百八十五に

『夜間ノ運動ニ在リテハ他方面ノ銃聲又ハ喊聲ニ牽カレテ其行進方向ヲ換フルコトナキヲ要ス云々』

とある戒を全く等閑にしたものであつて、他の中隊のことは評者の想像に過ぎぬけれども、此の第三中隊丈けは確かに此の戒告を無視したのである、左なきだに右に偏したる左翼隊の攻撃は、爲めに更に〳〵右方にかたよつて仕舞て左方に大敵の據れる強固なる陣地を殘すに至つたのてあつた。てあるから此の左翼旅團の攻撃就中其歩兵第二十九聯隊の夜襲は、頗ぶる夜戰の原理原則に合せぬ點の多い行動が頻發した爲めに、餘程困難なる狀況に陷るの不幸に際會して、遂に翌二十六日一日間頗ぶる困憊を極むるの惡戰を交ふるに至つたが。併しこれ位のことは實際に於て已むを得ぬことて、無缺點無過失の圓滿完全の戰鬪は指揮官が神樣てない以上は不可能てあるとすれば、先づこれ位の夜戰は成功と見てやるのが至當てあるかも知れぬが。去りとて研究としてはこれを默して看過しては其價値を減ずることが甚だしいので。稍〻成敗の跡を以て其可否を論ずるの傾向には陷つたけれども、立ち入つて此の位まで嚴重に評論を試みて見た次第てある。

そこで歩兵のことは先づこれて一段落として、今から更に砲兵に就て研究して見様と思ふが、此時砲兵は其一部の外は殆んど何等の用をもなさなんだのであつた。これは夜襲に砲兵の加勢の出來ぬのは當然で少しも怪しむには足らぬけれども、拂曉に於ては大に協力するの必要があるから、それが充分にやることの出來なんだのは、甚だ不本意千萬であつたと評者は考へるので、今からそれに就て聊か批評の筆を走らせ樣。但し此の砲兵に連關して歩兵第三十聯隊の一部の師團豫備隊としての行動も、序を以て研究して見樣と考へるから、諸君も其おつもりで戰史を御熟讀を願ひたいのである。砲兵第十二聯隊第五中隊は工兵第一中隊の援助を受けて、二十六日の午前二時に高家溝東方千五百米突に布陣したのは、前にも師團命令の所で一寸と述べたと思ふが、明拂曉の歩兵の戰鬪に加勢する爲めには餘りに好位置とは申せぬと考へる。此の中隊は此の師團唯一の山砲中隊であつて、此邊なれば何所へでも持つて行くことが自由自在である、況んやそれに工兵中隊の援助があるのであ

るから、全く鬼に鐵棒といふべき程に頗ぶる都合がよいのである。果して然らば此の山砲中隊の陣地を敵の本陣地を距るゝ、約略二千五百米突もある所に設けて態〻其效力を減殺する必要はあるまい。評者の見る所を以てすれば高家溝と書いてある文字の直き南方、左方道路の鞍部の東方に聳ゆる高地などは、何れも敵の陣地に著るしく接近し得る而已ならず、此の中隊が歩兵に隨伴せんとする場合にも何れも進出の都合は惡るくない。からして少しても位置を敵に近づけて拂曉の攻擊に加勢が十二分に出來得る如くしたならば、如何に此の歩兵第三旅團方面の此の朝の戰鬪に有利であつたか知れぬのである、であるから此の最初の陣地の選定は山砲としては少しく敵に遠過ぎたと評者は思ふ、野戰砲兵操典第二部第六十に

『夜暗ヲ利用シテ敵ニ接近スル場合ニ於テハ砲兵ハ通常晝間敵ノ射界外マデ近接シ夜間豫メ準備セル陣地ニ進入シ拂曉ニ至リ射擊ヲ開始スルモノトス』

又同第四十一に

『砲兵陣地ヲ敵ヨリ如何ナル距離ニ選定スベキヤハ狀況ニ關ス然レドモ勉メテ敵ニ近接シテ之ヲ選定スルヲ要ス(下略)

山砲ハ其特性ヲ利用シ野砲ニ比シ一層敵ニ近ク其陣地ヲ選定セザルベカラズ』

とある通り可成敵に近接して夜暗中に陣地を占め、此所から十二分に拂曉に於ける戰鬪を加勢して、暗黒中に於て協同することの出來なんだ取り返しをせねばならぬのであるが。それが此樣に遠く位置して居ては全く效力のないことはないけれども、甚だ不充分なる加勢しか出來ぬのであるから、これは頗ぶる遺憾千萬であると評者は考へるのである。併しながら此の山砲中隊は夜が明けてから敵が頑强に防禦するに方つて、先づ第一番に高家溝北方の高地線に歩兵に隨伴して進出して、次溝東方から我が歩兵を苦しめたる砲兵を默滅せしめ。更に松永旅團長の請求によりて宮川少佐現大佐高草木少佐現少將の毛石溝南方高地攻撃に方り。其一小隊を分割して此方面の攻撃を援助して多大なる效力を現はしたのは、實に申分のない活動のし方であつて、これ即ち野戰砲兵操典第二部第三に

『砲兵ハ通常大隊毎ニ一群トシテ使用スルモノトス然レドモ狀況ニ依リ中隊ヲ獨立シテ使用シ又ハ特殊ノ目的ヲ達スル爲メ小隊以下ニ分割シテ使用スルコトアリ』

とある末文の場合であつて。次溝方面又は大安平の方から敵は盛んに砲撃を行ふけれども、此方面には砲兵が少ないので全中隊を毛石溝南方高地攻撃に使用することが出來ぬ。そこで其二小隊を殘して依然次溝方面の敵砲に對せしめて、他の一小隊を高家溝附近に移轉せしめて其變換したる陣地から、頑强を極めて我が歩兵第三旅團の左翼を危險ならしめたる、左方の敵を攻撃する高草木、宮川兩大隊に加勢をして、同日の午前十一時前後に於て終に此の日の夜戰の結果を完全に我軍の手に收めさした。此の夜戰の跡始末の爲めには僅々二門の山砲が如何に多大なる效力を現はしたか知れぬ。此所が即ち同

操典第二部第四十五の

『機關銃ヲ配置シ若クハ掩護物ニ據ル敵ニ對シ我ガ歩兵ノ攻撃ヲ進捗セシメンガ爲メニハ機ヲ失スルコトナク若干門ノ砲車ヲ散兵線ニ進マシメ以テ其猛烈ナル火力ニ依リテ之ヲ壓倒シ我ガ歩兵ヲ推進スルヲ要ス』

とあると同じ意味の砲兵の使用のし方であつて、爲めに大に我が歩兵の推進手段として、たつた二門の山砲が頗ぶる偉功を奏し得たのであつた。

更に野戰砲兵第二聯隊は此夜襲に於て如何にしたかといふと、これは其第二大隊を缺いた三中隊を嘔吠嶺子東方千米突の、三叉路の南方高地の中腹に工兵第二大隊主力の援助を借りて布列したのは、既に前に師團命令の所でも述べた通りであるが、これも前同樣に敵との距離が少しく遠きに失して居る評者の考へては前にも述べた通り如何に野砲であつても山砲であつても、翁家溝西方の高地上ならば若干の運動は出來ぬことはない筈である、況んや工兵大隊もこれに加勢をして居るのであるから、何とか工夫をして翁家溝西方高地

上に砲兵陣地を設けたならば、歩兵第十五旅團の攻撃に對して拂曉にさへなれば、大々的に有效射撃を以て援助を與へ得て、頗ぶる師團の爲めに好都合で撃にも確かに幾分砲火を以て加勢し得る而已か。歩兵第三旅團の右翼の攻あつたに相違ないが。これもたしかに距離が遠過ぎたので少しも此の攻撃の爲めには役には立たなんだのは殘念である。由來此の樣な峻險を極めたる山地に野砲を用ひたのであるから、最初からこれに多大の希望を繋ぐことが出來ぬのは當り前であるけれども、さればとてこれは餘りに無益なる場所に位置したものであつたと思ふ。て此の砲兵第二聯隊の一大隊は殆んど使用せなんだと同樣であつたので、つまり此の師團の夜戰の爲めには僅かに第十二師團から加勢に來た、山砲第五中隊が獨りて大活動をした而已で、野砲三中隊は全く地形に制限せられて何等著るしき手柄を現はし得なんだのは、實に殘念至極であつたがこれは詮方ない次第であつて。これに付けても比較的好道路のある第十二師團から、今一中隊も山砲を借用して其代りに此の野砲大隊

を第十二師團の方へ廻したならば、双方ともに少なからざる利益があつたであらふと思ふのは、決して自分評著の偏よつた考案とけなすべきものではあるまいと思ふ。既に一中隊を借りるといふ迄に氣が附いたならば、更に一奮發して今一中隊を借りて來て、これを兩旅團の進路へ分進せしめたならば、非常に此の夜襲後の跡始末には大變に好都合であつたに相違ないと評者は信じて疑はぬのである。

以上の如き狀況で右翼歩兵第十五旅團は、殆んど模範的なる夜襲を決行し得たけれども。これに反して左翼歩兵第三旅團は、其の統一的指揮に缺ける所があつた爲めに、各箇各別に敵に當るといふ傾向に陷り、稍苦戰になりかけたのを師團豫備隊たりし、歩兵第三十聯隊の高草木、宮川兩大隊の加勢によりて、午前十一時迄かゝつて始めて敵を擊退し得たのは、少しく不手際であつたけれどもこれを他の夜戰に比較すれば先づ大成功であつて。更に砲兵の山地に於ける運動の困難は、終に野砲をして無用の長物たらしめて仕舞たの

も、大に將來に向つて鑑戒とすべき好戰例を殘したのであると共に。一山砲中隊が四方八面に向つて大效力を現はしたのも、これ又如何に山地に山砲の必要であるかを證據だてたるものとするに足るであらふ。之れを要するに此の戰闘は日露戰役中師團を以て行なへる夜戰の中に於て最も成功したる戰例を青史の上に殘したものといふべきであるが。それても今いふた樣な多々なる缺點があるのであるから、吾れ人ともに今後大に此の夜戰の爲めには、全力を盡して平素の研究と鍛鍊が必要であるのは、評者がいはずとも讀者が既に御承知のことであると思ふ。

例を逐ふて聊か露軍のことを研究するが、敵の新東部兵團長ビリデルリング大將は其第十軍團を東向せしめて、標高六三九高地から紅砂嶺に至る間を守り。西伯利第三軍團を南向せしめて右翼成子山より左翼標高六三九高地迄を守らせて。此標高六三九高地から彎形を畫いたる次溝東北標高六〇九高地迄の間は、これを第十軍團のリヤピンキン少將支隊の、歩兵一旅團と二大隊、

騎兵二中隊、砲兵二中隊半を以て守らせて居たが。此場合に於て此のビリ大將は我が第一軍の兵力を左の如く判斷したといふ、即ち

一　賽馬集街道より進むもの　二乃至三師團

二　梨皮峪及老官嶺より進むもの　各一旅團以上宛

三　東黃泥崗附近より進むもの　約一師團半

其合計六師團乃至六師團半といふ計算であつた。一體此將軍は風采は他に類のない程な非常に立派な名將軍であるが、其本質に至つては頗ぶる凡愚等の隊長であつたのは事實であつて。我後備までをひつくるめて四師團足らずの一軍を、六乃至六師團半と判斷したのであるから、五割以上の買ひかぶりをしたのであつて、全く緣日の植木を先きのいゝ値でかつた樣なもので、これでは到底有利なる商賣の出來樣筈がないのである。が併しこれ實に連戰連敗の結果は敵さへ見ればそれが甚だ強大に見へて來たのであつて、つまり此の將軍は敗戰の餘にケルレル中將の戰死の跡釜に据り込んだのはよいが、餘

りに明敏でない老朽なる頭腦を持つて居た爲めに、敵を誇大に幻視する所の誇大妄想病にかゝつたのであつて。これは此のビリ將軍ばかりではない、敵の全軍の上下が此の樣な病氣に罹つた傾向のあつたのは事實である。からして露軍は實際に於て其兵力は遙かに我軍に優越して居たのであるが、彼れはそれを大に劣勢であると悲觀して居たのである。これでは如何にしても戰勝を得る見込はたゝぬのであるが、併しそれも無理からぬことであつて、我軍は常に寡を以て衆を破つたのである。から敵は其寡兵を自分の衆兵よりもずつと多いと考へたのである。其結果は終に五割以上の買かぶりをして仕舞たのである。これ實に一に志氣の沮喪が其主因をなして居るといふが至當であらふ。

さて右樣の過大なる敵情判斷をして居る所へ、八月二十四日から二十五日にかけて賽馬集街道の方へ出て來た我近衞師團を、ビリ大將は二師團以上と又しても過大に判斷した。けれどもこれは西伯利第三軍團の方面、即ち南方

面てあつて廣く東方面を防禦して居る第十軍團の方には、何等日本軍が企圖する所がない模樣であるのを認めたる同大將は。第十軍團長スルチエフスキー中將をして、合家堡子方面から猛烈に攻勢に轉じて、第三軍團の戰鬪を速に援助すべきを此の二十五日の夕方に於て命令した。此命令を得たる第十軍團長は翌二十六日の午前六時を期して、弓張嶺から合家堡子の方面に突出して大攻勢を取らんとして。それ迄大安平に集めて置いたる同軍團の總豫備隊の殆んど全部、即ち步兵二箇聯隊、騎兵一聯隊、砲兵三中隊を擧げてワシリエフスキー少將の指揮に屬して、同夜出發次溝に移轉し明朝午前六時を以てリヤビンキー少將支隊と協同して、合家堡子へ突出せんとして現に其中の步兵第百二十一聯隊の如きは、手廻しが早かつた爲めに次溝に到著せんとして居た二十六日の午前一時頃。思ひがけなく俄然我が日本軍から先を越されて第十軍團全正面に攻撃を受け、就中八盤嶺から弓張嶺及其以南の、露軍が正に攻勢の爲めに進出せんとして居た鼻先へ、猛烈なる夜襲を受けることになつたので、

惜しむべし折角の此の大有望なるべき攻勢移轉も全く中止するの止むを得ざるに至つたのであつた。

彼れや我軍を以て自己の軍より優勢なりとして居る、これは連敗の結果から來せる志氣の沮喪が原因であつて。これに反して我軍は連戰連捷の餘威に乘じて、我より遙かに優勢なる敵を見ても少しもこれを恐れずして、却つてこれを劣弱なりと見くびつて居たのである。斯く志氣上に大相違があつた上に何といふ好運なことであらふ彼れビリ大將が攻勢移轉の命令を下したる、二十五日の夜に於て折もあらふに我軍も同じく攻撃實行にとりかゝつて。彼れが翌朝攻勢移轉の準備最中へ、猛烈果敢に突然夜襲を決行したので、彼れは遂に此の攻撃を中止して、諸方より進來する日本軍の防止に忙殺されるといふ受身に立つに至つたのは、これ全く天運の然らしむる所であつて決して戰の罪でない。若しも僅かに此際露軍が先手を打つて、我が夜襲前に夜襲を以て我第二師團の右翼へ向つて突然進迫したならば、我第一軍の夜襲の計畫は

爲めに散々に破壊されて、殆んど中止せねばならぬ樣な運命になつたかも知れぬ、觀じ來れば實に機一髪の相違て敵味方の勝敗が全然其位置を轉倒したのである。これは人力ではない天祐である大御稜威である。が併し此の天祐此の大御稜威なるものは、決して引込み思案の人の上には降つて來ぬ、即ち所謂攻撃精神に充實して居る所の衆敵を破ぶるに寡兵を以てし、少しも敵に畏怖する所のない勇武の軍隊であつて、始めて此の天祐の冥助の恩に浴することが出來るのである。西歐の哲人は『天は自から助くるの人を助く』といふ金言を遺して居るが、即ち戰爭に於てもこれと全く同樣であつて、決死奮闘努力する軍隊には常に此の天祐が降だるのである。かくして天祐なるものは進んで自から之を取らねば、決して自然に頭の上へ落ちて來るものではない『果報は寢て待て』といふ俚諺はあるが、働らかぬ以上は晝寢をして居る口の中へ棚から牡丹餅は決して〳〵落ちては來ぬ。要するに此の第二師團方面では晝夜間斷なく地形敵情を捜索偵察して、少しも敵に我が方面に手出しをするの暇なからしめ。其間に敵情を知り好機に投じて、一舉大夜襲を決行した爲めに敵が少しのことて後手に廻つて仕舞たのである。即ち我が第二師團は奮闘努力一日も怠たらざりし結果、此の弓張嶺の大夜襲を美事に成功せしめ得て以て我第一軍の捷利の基礎を其中央の地區に於て確實に樹立し得たのであつた。

大正三年八月二十六日印刷
大正三年八月二十九日發行

不許複製

著作者　無名戰士
（戰史評論奧附）

發行者　宮本林治
東京市麹町區平河町四丁目十一番地

印刷者　山田三次郎
東京市芝區櫻川町十七番地

發行所　東京市麹町區平河町
宮本武林堂
振替東京一〇九一二

同志會編著　●代金ハ前金ヲ振替口座へ拂込ヲ乞フ

新舊對照 **陣中要務令改正要領**

全二冊

體裁二段組菊版
價二冊金九拾五錢
郵稅 內地八錢 外地十二錢

陣中要務令ノ野外要務令ニ對シテ如何ニ改訂革新セラレタルカヲ研究スルハ吾人刻下ノ最大急務ニシテ、而カモ其之ガ研究ニ新舊ヲ對照スルハ最善最良ノ方法ニシテ亦腦裏ニ銘記スルコト一層確實ナルモノトス而シテ本著者ガ最モ苦心ト注意ヲ拂フテ三段論法的ニ先ヅ改正ノ眼目次ニ各篇中改正ノ主要點、終リニ全條項ノ對照研究ヲ詳述シタル、所謂簡ヨリ繁ニ入リ最モ理解ヲ容易ナラシムベク勉メタル、而カモ所說適確對照正當ナル本書ヲ一讀セラルニ於テハ蓋シ逐一讀者ノ肯綮ニ中リ改正ノ意義ハ釋然トシテ忽チ氷解スベシ。速ニ購讀アランコトヲ切ニ冀フ。

發行所　東京市麴町區平河町　振替東京一〇九一二　宮本武林堂

豫告　九月刊行　戰史評論　寒坡嶺附近の戰鬪

戰史評論

大正三年十一月(寒坡嶺附近戰鬪)

宮本武林堂發行

大正
3. 11. 27
內交

戰史評論

第十九回　寒坡嶺附近の戰鬪

無名戰士評　成仁武夫補

讀者諸君思ひがけない西歐大陸の大戰亂は、其波動を遠く數千里を隔てた
る東亞の果ての我が日本國に迄及ぼして、今や青島は慘たる屍山憯たる血河
の壯烈極まる新兵器新戰術の大實驗。恐ろしげなる暗雲急雨の空模樣は、未
だ容易に晴を放つに至らぬといふ――雛形的の小規模なるものではあるが――
世界的一大戰爭を惹起した。之が爲に其影響を被つたるものは內外共に少な
くないが、就中其戰爭と最も直接の關係を有する當評論の如きも、開戰前後
から少なからざる此の歐洲大陸戰の飛沫を受けて、日のたつことは飛行機よ

りも疾く九月は終に刊行を延期し、更に十月には入ても評者は原稿を筆にするの餘閑を有せずして、つい其儘で時雨れ降るてふ十一月となつて仕舞たのは、毎に發刊を待ちこがれる讀者諸君に對して評者が深く其罪を謝する次第である、が併しこれとても決して評者が故意よりする疎懶怠慢より生じたる遲延ではなくして、其間いふにいはれぬ種々様々なる出來事が評者をして非常に多忙多端ならしめた爲に、西奔東走席煖まるに暇あらず隨て其頭の中は混亂紛糾して仕舞て、往きし日露の戰史を研究する所の沙汰ではない、現在目前に發現したる、最急最新の大實驗を見のがすまいと氣を配り心を焦らせた爲に、此の評論が二箇月間諸君の机上に其影を見せなんだといふ次第であつて、評者の罪は深くして且つ多しと雖どもまた怨すべきの黙なきにしもあらず。發行書肆武林堂の如きは爲に四方八面より矢の催促の楚歌の聲に閉口して評者の宅まで毎日毎夜飛行機を飛ばし無線電信をかけるといふ大騒動。併し如何に毎日毎夜飛行機無線電信を飛ばして、機關銃式の間斷なき催促を

決行しても、遠き漠々たる戰雲の中に其姿を沒したる評者のもとには、流石文明の利器も容易に其效力を現はすに至らずして、相濟まぬことではあるが。總攻撃も不日開始せられるといふ小春日の長閑さに、飛びまはつて居る評者の頭腦の中にも少しく暢んびりとした所が出來かゝつて來たので、こゝに筆硯を新にして燈火可親秋爽の氣分を利用して、再び諸君に此の紙上に見ゆるに至つたのであつて實に全く相濟まぬ次第であるが、いふ迄もなく評者は此の評論を專業として居るものではなくして、他に隨分と重要を極めたる相當に繁劇なる職務を持つて居るのであるから、可成將來今度の様なことはせぬつもりであるけれども。併し突然天下に乾坤一擲といふ様な非常の出來事のあつた場合などには、又々一時其刊行の遲延するといふ様な場合がないとは今から斷言することを得ぬ。が併しよしや一と月や二た月は遲延しても筆の命ち毛の續かん限りは、決してこれを廢刊する様なことはせぬ考であるから、讀者諸者に於かれても何卒そ

の御考を以て氣長に御愛讀の榮を賜はらんことを、事情を打ちあけて切に評者から御願申上げる次第であつて。殊に此の刊行の遲れたるは發行書肆其のには少しも手落ちのあつた譯ではなく、全く事局と評者と補助者の大多忙から此樣なる失態を來したのであるから、罪のないのみか必死になつて讀者の爲めに評者の筆を執らぬのをもどかしがり。泣いて見たり怒つて見たり笑つて見たりとぼけて見たりして、催促に憂き身をやつして居た武林堂主人を、餘りにいぢめぬ樣に只管評者から懇願致す次第である。

閑話休題愈〻これから寒坡嶺の戰鬪の研究に移るが、此の戰鬪の爲めに八月二十五日午前十時に、第十二師團長井上光閣下の命令せられたる部署は概して同意である。何等これといふて申上ぐべき點はないと思ふが、就中其前日なる二十四日の午後二時に各團隊長を師團司令部に召集して、傳達したる九箇條の注意は實に非常に此戰鬪の成果を收むるに大切極まるものであつてそれは戰史の上には記載してないけれども、陸軍大學校に於て兵學敎官梅崎騎

兵少佐か講授したる、日露戰史講授錄に明瞭に記載してある。故に讀者中には既にこれを讀過せられた人々が多からふが、併し此研究の順序として、先づ此の注意を摘載して其研究の端を發して見樣と思ふ、其注意とは即ち左の如きものである。

一、師團ハ可成二十六日拂曉迄ニ寒坡嶺ノ線ヲ奪取センコトヲ希望ス

二、木越旅團ハ二十六日拂曉迄ニ紅砂嶺、游擊溝嶺ノ線ヲ奪取シ朴溝ヨリ三家子ニ亘ル間ヨリスル敵ノ逆襲ニ對シ此線ヲ守備スルヲ要ス

三、第十二旅團ハ二十六日拂曉迄ニ大寒坡嶺、八盤嶺ノ線ヲ奪取シ右翼隊ニ連繫シテ三家子方向ヨリスル敵ノ恢復攻擊ヲ拒止スルヲ要ス

四、兩旅團ハ目的地ニ達セハ直ニ砲兵陣地ヲ偵察シ追擊及逆襲防止ニ適スル陣地ヲ砲兵聯隊長ニ通報シ速ニ其陣地ヲ變換セシムヘシ

五、兩旅團ハ二十五日展望自在ナル地ニ於テ各隊長ニ地形ヲ指點シテ豫メ運動ニ關スル詳細ヲ指示スルヲ希望ス特ニ晝夜ノ別ヨリ生スル地形ノ變

狀ニ就キ將校ハ其視力ヲ慣ラシ方向ヲ誤マラサルニ注意スルヲ要ス

六、二十五日午後八時半迄ニ兩旅團ハ一所或ハ二所ニ敵ニ祕シテ集合シ藍河以西ハ可成連繫ヲ有スル數縱隊ヲ以テ前進ヲ實施シ第一次ノ目的點ニ達スル迄ハ勉メテ火戰ヲ避クヘシ要スルニ靜肅、集結、及運動ノ迅速ニ就テハ懇切ニ部下ニ訓戒シ置クヘシ

軍ハ二十八日大安平西方高地ヲ攻擊スル豫定ナレハ以上ノ目的ヲ達シタル後ハ此ノ次ノ目的ニ對シ直ニ地形偵察ヲ爲スヲ望ム特ニ木越旅團ノ右側ニ於テ然リトス

七、省略ス

八、歩兵ハ黎明ト共ニ敵陣地ニ突入スヘキヲ以テ山砲聯隊及後備野砲中隊ハ直ニ前進シ追擊射擊並ニ右翼隊ノ爲メニ述ヘタル目的ニ適合スル陣地ヲ偵察シ迅速ニ區處ヲ爲スヘシ砲兵ノ前進路ハ孤家子——大安平街道附近ニ於テ適宜左右翼隊ノ直後ニ跟隨スル如ク選定シ行進中直接護衞ヲ要スル場合ハ左翼隊ヨリ之ヲ出ス

九　當師團ハ第二師團ノ動作ト連繫スルヲ以テ其處置ノ緩慢ヲ好マス一ニ指揮ノ巧妙ト軍隊ノ精銳トニ信賴シテ此目的ヲ達セントス

此の九條に分てる注意は實に綿密周到を極めたるものにして、全く以て夜戰に於ける大要訣と認むべきものであると自分は思ふ。即ち師團は二十六日拂曉に於て寒坡嶺の線を奪取するを希望するといふ目的を第一に示し。第二第三に於て其各旅團に其占むべき詳細なる位置と、其占領後に於て第一になすべき敵の逆襲に對する處置とを明示し。更に第六の末に於て軍が二十八日に於て攻擊せんとする方向を示して、其地形偵察迄を命じたのは即ち歩兵操典の第二部第八十三の

『前略要スレハ到著地點等ヲ明示スヘシ又事後ニ於ケル第一ノ處置ヲ豫メ示シ置クヲ利トスルコトアリ』

といふ夜戰の準備を適切至當に注意したものであつて、又其第五は即ち歩

兵操典同條の

『夜戰ニアリテハ指揮官ハ百方手段ヲ盡シテ精細ナル計畫ヲ定メ成ルヘク晝間ニ於テ各部隊長ヲ集メテ之ニ命令ヲ下シ以テ諸準備ヲ爲サシムヘシ』

とある正條に吻合するものである。更に其の第八は歩兵操典第二部第八十四の四の末項に該當して居る而已か、其第五は歩兵操典第一部第百八十四の

『夜間ノ攻撃運動ハ特ニ靜肅ニシ連繫ヲ保チ確實ニ行進方向ヲ維持シ敵ニ接近スルヲ主要トス之カ爲メ勉メテ單一ナル隊形例ヘハ密集隊ニアル中隊ヲ併列又ハ重疊セルモノヲ用ヒ且危險ナル外翼ヲ警戒シ要スレハ裝塡ヲ禁シ近ク豫備隊ヲ隨ヘテ前進シ火戰ヲ行フコトナク直ニ突撃ニ移ルヲ可トス』

とある條項の意味を含んだものであつて、此の九箇條は正に現行歩兵操典第二部夜戰の部の全部の意味を含んだものといふことが出來る。但し其中に一箇條操典にない極く大切なる注意が掲げられて居ることを忘れてはならぬ、即ちそれは第四の先進歩兵が砲兵の爲めに陣地を見付けて知らせてやるといふことであつて。地形が明白に我軍中に知られて居らぬ場合に、此の先進歩兵が後方から續行する砲兵の爲めに、其陣地を見付けて速に知らせてやるといふことは、實に大切なる注意であつて何故に此樣な緊要なる條項を操典第二部の夜戰の部に掲げなんだのであらふか。勿論砲兵陣地偵察の爲めに斥候も出し將校も派遣するから、歩兵から知らせてもらふに及ばぬ樣である上に、夜間は如何なる方法を用ゆると雖ども適當に砲兵の陣地などを選定し得るものでないといふ見地から、此の第四の注意を操典には掲げなんだものかも知れぬ、がこれ實に評者は頗ぶる遺憾千萬なことであつたと思はざるを得ぬのである。

此の寒坡嶺の夜戰に於て第十二師團の兩翼隊が、此の緊要なる第十二師團長故井上大將閣下の此の第四の注意を、始終忘れずに遵守して後方の砲兵聯隊長に知らせてやつたならば、此の二十六日の拂曉の戰に我砲兵が距離遠大なりし爲め、其威力を發揚し得ずして一時稜線の後方に閉息するといふ樣な

不利もなく、何れの方面も其戰鬪を更に一層好況に進捗せしめ得たであらふ、實に惜しむべきことをしたものであつて。何れの旅團長も聯隊長も唯々前面の敵に而已氣を奪はれて、誰れ一人適良なる砲兵陣地を後方に知らしてやるものがなかつたのは、これ實に全くの手ぬかりであるといはねばならぬ。或はそれを知らせた團隊長もあつたか知れぬが、戰史の上には確かにそれが記述してなく、その上其陣地が何れも極めて不適當であつたのは、即ち此注意の缺けた證據であつて如何にも殘念千萬であつた。此の大切なる緊要事項が戰場匆忙の爲めに等閑に附せられて仕舞たのが、少なからず我が第十二師團の攻撃の上に不利を持ち來したのはいふ迄もあるまいと評者は考へて居るものである。

既に前にも述べたる如く右翼隊には第一次に熊家堡子より毛家堡子に亘る線を占めさして、第二次に於て紅砂嶺から游撃溝嶺に亘る線を占領せしめ。又左翼隊には第一次に小寒坡嶺の南北を占めさして、第二次には大寒坡嶺より八盤嶺、七盤嶺に亘る線を占領せしめんとしたる。此の全攻撃の計畫が頗ぶる適當であつた上に、更に此の九箇條の金科玉條とも稱すべき大切な注意が下されたのであるから。此の第十二師團の夜戰の頗ぶる好都合に進捗したのは至當の結果であつて、實に最とも合理的に適當に計畫し命令せられたものであると評者は信ずる次第である。

命令や注意のことは先づこれ位にして置いて、さて愈〻今から其實施に就て研究の歩を進めるとするが。師團諸隊は何れも師團長の希望の如く頗ぶる靜粛に集合して、最も巧に少數の掩護隊を前方に進め、其掩護によりて藍河を徒渉して大なる敵に遭遇することなく、兩翼隊ともに第一次の目的線に達し更に進んで第二次の本目的線に向つたが。敵に通ずる主要道路の通じたる、大寒坡嶺も八盤嶺も何れも敵の稍〻頑強なる抗拒に遇ひ。就中歩兵第四十六聯隊の進んだる。敵第十軍團の退路に最も近き熊家堡子西方高地は、非常に頑強なる敵の抵抗に出會したが。此時唯一箇聯隊だけ敵の大なる抗拒に出會す

るに至らずして、直ちに其本目的地なる游撃溝嶺を占領し得たのは何の爲めであるか、これ實に大に研究すべき價値ある問題であると評者は思ふ。

歩兵操典第二部第九十六に曰く

『山地ノ戰闘ニ於テ攻者ハ敵方ニ通スル道路、谷及稜線ヲ利用シテ前進シ云々』

とあり又同第九十七には

『山地ノ防禦ニ於テハ敵方ニ通スル諸道路ヲ堅固ニ守備スルヲ要ス若交通便利ナルトキハ各地區ニ備フヘキ兵力ヲ減少シ大部ヲ總豫備隊ト爲シ進出便利ナル地ニ備フヘシ云々』

と明白に記載してある所から、敵は此方面の防禦を計畫するに方ても、八盤嶺を過ぐる街道と、孤家子——大安平本街道と、それから自己軍の退路に近き熊家堡子西方高地稜線及其谷地に通ずる道路と、合計三條の道路と一稜線を主として堅固に防禦した。即ちそれは山地に於ては主要道路の通ずる所に

敵が襲來するといふ、古來からの戰術上の原則を其儘大に道路の守備に意を注いだのであるから、其守備嚴重なる三方面に向つたる諸隊は何れも頑強なる抵抗を受けたのであるが。圖上に點線の細路が斷續的に通じて居るばかりの、孤家子から毛家堡子の北方を經て王家堡子、化事孤子を經過する所の山地は、頗ぶる敵が油斷をして其兵力を備ふること極めて少なかつたのである。然るに我が木越旅團の歩兵第二十四聯隊は此のしかとした道もなき山地を、しかも夜間に於て迅速に前進した爲めに、盖く敵の不意に出づるを得て何等大なる抵抗を受けずして、紅砂嶺の敵に對しては右側背、大寒坡嶺の敵に對しては左側背に當る所の、游撃溝嶺から老坂溝に亘る高地を、何の苦もなく迅速に占領することを得たが。此歩兵第二十四聯隊原田輝太郎大佐の突進は、頗ぶる敵の此方面の全線の上に不安を與へて、爲に大寒坡嶺の如きは甚だ頑強なる抵抗をなし果さずして退却せざるを得ざるに至つたのであつて。これ實に原田大佐の聯隊の中央突進の效果であると共に、何故にしかく容易に此

方面面已が前進し得たかといふと前に述べたる如く、山地の戰鬪には道路が大切てある道路さへ守備すれば其外は大丈夫といふ、古來からの戰術原則を餘りに過信したる結果として。さして通過困難ならざる此毛家堡子、化事孤子の方面の守備を嚴にするを怠たつたのがそれが抑〻の原因てあつて、敵が餘りに山地防禦の原則を株守した爲めに、我が第二十四聯隊は非常な好運を贏ち得て敵中に突進し。其兩側の敵をして何れも側背に不安を抱くに至らしめたのは、實に大に注意すべき事柄てあつて、此の歩兵第二十四聯隊の急前進が此の夜戰に非常の利益を與へたのは、評者が論ずる迄もなく明瞭確實なる事實てある。

敵の左翼垣山、紅石嶺附近は、此第二十四聯隊の急進ありしにかゝはらず、頑強無双に朴溝北方の敵と協力して最後迄死戰したが、これは實に尤千萬なる次第て其全軍の退路を安全にする爲めに、死を決して此の陣地を固守したのてあるが。爲めに此の敵は終に六門の砲熕を委棄して退却するの已むを得ざる悲境に陷つたのは、蓋し此の原田聯隊の急進側背を危くしたのが主因てあつて。更に又大寒坡嶺及び八盤嶺方面の敗退も、全く此の聯隊に其退路を脅威された爲めに、勒強に長く右の陣地を堅守する能はずして、湯石溝、三家子の線に退却せざるを得ざるに至つたのてあつて。此戰に於て一番苦戰をせずして一番有力なる、成果を擧げ得たのは、此の福岡衞戍の歩兵第二十四聯隊てあつた と評者は信ずる、好運兒なるは實に原田大佐てあつた。

事の序に師團長から此の急進奏功の歩兵第二十四聯隊の直後を進めと命ぜられたる、野戰砲兵第十二聯隊と後備砲兵中隊のことを評論するが、一體此の砲兵は二十五日の命令では、原田聯隊の直後を前進して、紅砂嶺、大寒坡嶺八盤嶺を砲撃し得る如く陣地を選定することを命ぜられ、其進路は孤家子—大安平道附近に於て任意に選定することを許されて居るが。此の砲兵は其前方にある原田聯隊の急進したるに關せず、頗ぶる其行進が遲々たるものであつた而已か。如何にしても第二次目的地までは、其距離が遠大てあつて到底

砲撃の效果を擧げ得べからざる所の、毛家堡子兩側の所に夜半から陣地を占めて停止して居たのは頗ぶる時機に適合せぬ處置である。何故に原田聯隊と連絡を絶たぬ様にして其前進に伴なひ、一尺でも一間でも敵に近づくといふ考をせなんだのであるか、殊に況んや此の聯隊は山砲であるから地形の險難は凌ぎ易いのである、進んで歩兵の聯隊の直後に前進する位の意氣がなければ、其山砲の短かい射程を以て敵を壓倒することは大困難である。然るに悠然として第一次目的地の後方に構へ込んで、歩兵部隊と相伴なふて前進せなんだのは大なる砲兵聯隊長の過失であると評者は信ずる。

但し前の注意もあつたことであるから、聯隊長は此の陣地を占めて何れかの歩兵聯隊長か又は旅團長から、良好なる陣地を知らせてくれるのを待つたのかも知れぬ。然るに歩兵の旅團長も聯隊長も全く眼中に血がは入つて、馬車馬式に前面の外は少しも見へなんだものであるから、つい〳〵大事の砲兵陣地などのことは忘却して仕舞たのであらふ。此の歩兵の團隊長もこれ實に

不都合である不親切である。此の様に砲兵聯隊長と歩兵の團隊長の不注意同志が鉢合せをしたのであるから堪らない、忽ちにして砲兵は大不利なる地位に立つに至つて、終に此の戰闘間大に苦戰をした而已で大なる效果を奏するを得なんだ。がこれ實に歩兵團隊長が師團長の大切な注意を忘れたのと、砲兵聯隊長が師團長の希望したる地點迄進出するのを躊躇したのが抑〻の原因であつたに相違ないのである。

野戰砲兵操典第二部第四十一に曰く

『砲兵陣地ヲ敵ヨリ如何ナル距離ニ選定スヘキヤハ狀況ニ關ス然レトモ勉メテ敵ニ近接シテ之ヲ選定スルヲ要ス是敵ノ陣地及我カ歩兵線ノ景況ヲ確認スルコト容易ニシテ火力ノ發揚及共同動作ヲ確實ナラシムルコトヲ得レハナリ

山砲ハ其特性ヲ利用シ野砲ニ比シ一層敵ニ近ク其陣地ヲ選定セサルヘカラス』

操典は其攻撃の部に於て此様に要求して居る、況んや師團長からは明拂曉紅砂嶺から大寒坡嶺、八盤嶺を射撃し得る如く陣地を占領せよとの命を受けたのであるから、此砲兵の聯隊長たるものは決してぐづ〳〵して居るべき譯のものでない。其直ぐ後方から進むべく師團長から命ぜられたる歩兵第二十四聯隊が進んだならば、何も躊躇することなくこれに跟隨して一寸でも敵に近づかんとするが至當であつて、よし暗夜の爲め一時毛家堡子附近に陣地を占領したりとするも。此所から師團命令の明拂曉の目的地として示されたる諸點は、到底距離遠大にして射撃の不可能であるのは知れ切つて居ることであるから、速に前進歩兵の後を追ふて更に陣地を求むべきである。而して此際尤も此の砲兵の陣地として適當であつたと思ふのは、後に至つて此の聯隊の第二、第三兩中隊の占めたる、王家堡子西南約千米突の高地であると評者は考へる。即ち此夜歩の第二十四聯隊が好運にも遠く游撃溝嶺まで進出し得たのを知つたならば、一時毛家堡子の南北に陣地を占めた砲兵聯隊は、

直ちに此の陣地まで山砲一箇大隊を進めて、其他の山砲一中隊と後備野砲一中隊とはこれを大安平街道を小寒坡嶺附近まで進出せしめるがよいのである。斯くすれば師團長から希望されたる所命の目的地は何れも砲撃し得る而已か、其射撃距離も何れも三千米突以内であつて山砲と雖ども頗ぶる有效に射撃し得たのである。而して歩兵か非常に迅速に前進したのであるから、此砲兵は拂曉前には何れの方面も評者がいふた所の地點まで進出し得て、且つ充分に射撃の準備をするの時間はあつたのであるが。砲兵聯隊長は過早に後方に陣地を占めて泰然と構へ込み、前方の歩兵と共に陣地偵察の斥候を派遣するの注意を缺き。又其前に出てたる所の歩兵の方では師團長から懇々と一大事であるとまでいふて注意したるに關せず、砲兵陣地を偵察して之を後方の砲兵に知らせることを怠つた。否々決して怠たつたのではあるまい戰場多忙の爲めに忘れたのであらふ。が何れにしても砲兵の爲め陣地を見付けて知らせてやることをせなんだので、此拂曉の大切なる攻撃には何れの方面にも砲兵が

遠大なる距離にあつた爲め、惜しむべし其威力を絶大に發揚することを得なんだのは實に遺憾千萬てあるが。同操典第二部第二十八に

『夜間ノ陣地占領ハ過誤ヲ來シ混雜ヲ招キ易シ故ニ爲シ得ル限リ晝間豫メ周到ナル注意ヲ以テ偵察ヲ行ヒ諸準備ヲ整フルヲ要ス』

とある如く夜中不知案内の敵地てある上に、晝間は到底偵察も準備も出來ぬ場合てあつたのてあるから、實際これは已むを得ぬ次第てあつたのてあらふが。左るにても師團からあれ迄の注意があつたに關せず、其砲兵陣地が頗ぶる適當てなかつたのは、歩兵にも砲兵にも確かに不注意な點のあつたのは、辯解するの餘地がない筈てあると評者のいふた、地點迄進出して居たならば、敵の退却に方つては烈しくこれに追撃射撃を加へ得たのてあるから、敵はより以上の敗走に陷いつたに相違なく、又彼の垣山に向ふたる豊田龍成少佐の大隊の如きも、あれまての惡戰苦闘をやるには及ばなんだてあらふと思ふ。これに付けても同操典の第二部第五の左の一項

は忘れてならぬ金科てある玉條てある

『砲兵ハ勉メテ敵ノ小銃有效射撃界外ニ動作スルヲ可トスト雖其主要ナル任務ハ地形及時機ノ如何ニ拘ハラス適切ニ歩兵ヲ援助スルニ在ルヲ以テ常ニ之ト密接ノ關係ヲ保ッヲ要ス殊ニ決勝ノ時機若ハ特殊ノ目的ノ爲メニハ最モ猛烈ナル敵ノ歩兵火モ之ヲ忌避スルコトナク敵ニ近接シ砲火ノ最大威力ヲ發揚シ以テ我カ歩兵ニ有形無形ノ至大ナル援助ヲ與ヘサルヘカラス』

砲兵に對する苦情は先づこれ位にして置いて、さてこれからは中央方面の戰闘は大略順境に進んだので、さして云ふべき箇條もない樣てあるから、今からは其雨翼に向ふたる歩兵第四十六聯隊の紅砂嶺附近の惡戰と。歩兵第十四聯隊の八盤嶺に於ける勇戰とを研究して見樣と思ふが。戰史記述の順序から先づ歩兵第四十六聯隊の平井大佐(現中將)の戰闘から先に評論を試みることにし樣。

此の聯隊は達子堡附近に於て都合よく藍河を渡り、其主力は趙家堡子から

栗子園に通ずる道路のある谷地を進んで、張家堡子西南方の岩山に向ひ。豊田少佐(龍成)の率ゐる同聯隊の第三大隊は砲二門、工兵若干と共に、此の谷地の西側をなせる險峻なる高地の稜線上を前進したのであるが。此聯隊の目的としたる垣山及び紅砂嶺は、其西方の朴溝西方高地と相協力して、敵の第十軍團の唯一筋の退路たる大安平より石咀子を經て遼陽に通ずる大街道を掩護すべき、最大重要の敵陣地中の大鎖鑰地であつたのであるから、敵は容易にこれを我平井聯隊の手に渡さうとせぬ。此戰によりて勇猛無比の名を全軍に轟かしたる豊田少佐は、彼の橋頭の勇戰にも名を知られたる羽生少佐の大隊の一部と共に、險隘にして大兵を進め難き山背を進んで、敵の猛烈を極めたる彈雨の中をものともせず、繰り返し繰り返し獅子奮迅の勇氣を以て何度となく突擊を決行したが、敵も去るもの一軍團の死活の分岐點である所の、此の垣山一帶の陣地を容易に棄てる氣色を見せぬ。大安平や松泉寺からは、さてこそ軍團の一大事と、控置したる豫備隊の大部分を此の方面に增加したので、

平井聯隊就中其最右翼の豊田大隊は、全く九死一生の悲境に陷たのであつた。

これが並大抵のものならば疾ふの昔しに退却したかも知れぬ、然るに天性勇猛果敢なる豊田少佐は、如何に損害が大てあつても、如何に敵兵が增加しても、何等少しも懼れもせねば驚ろきもせぬ。迫らす焦らす自若として更に聊かも其攻擊の氣勢を鈍らさず、失敗しても又もり返して突進し、擊退されても又勇を鼓して肉薄し、彼の步兵操典の第二部第四十二の

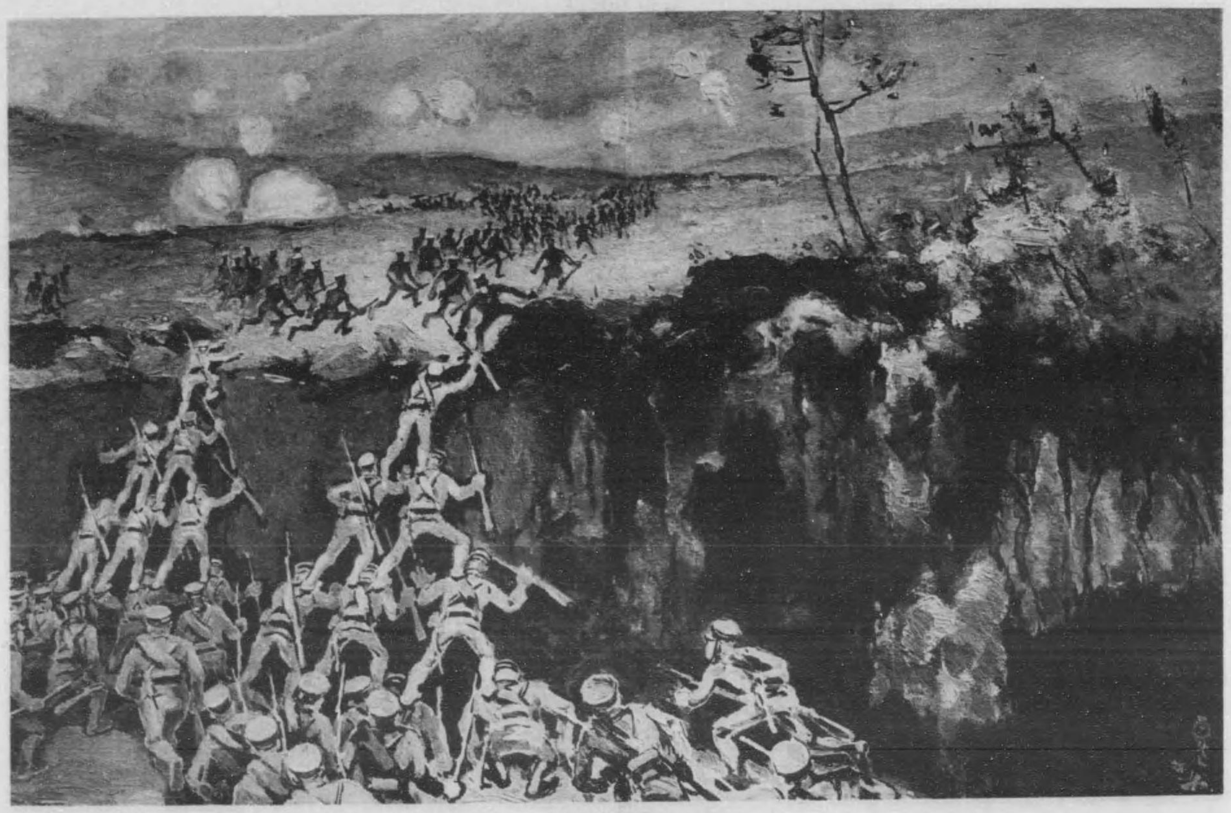
『突擊ヲ擊退セラレタル場合ニ於テ尙密集部隊ヲ有スルトキハ其推進ニ依リ第二第三回ノ突擊ヲ敢行スヘシ縱ヒ推進部隊ナキトキト雖幹部ト兵卒トノ勇氣ニ依リ至近ノ所ニ陷止マリ猛烈ナル射擊ヲ爲シ氣勢ヲ恢復シテ屢〻突擊ヲ繰返シ終ニ其目的ヲ達スルニ至リテ止ムヘシ』

とある條文をその儘、實に天晴れな美事な大稱贊に値する惡戰苦鬪を繰り返したが。無盡藏なる豊田大隊の攻擊精神の旺盛なるには、流石に勇猛なる魯軍の退路掩護隊も終に敵することを得ずして、見苦しくも紅砂嶺上に六門

の砲を委棄して退却するに及んだが。此戰に於ける豊田大隊の死傷は實に非常なものであつて、全大隊中多少の負傷をせぬものは僅に兩手の指を屈する程もないといふ有樣。如何に勇ましい奮闘ぶりであつたかは、此一事でも大體推察することが出來樣。

日露戰史の上に於ても此大隊の勇ましき戰闘ぶりは、確かに特筆大書的に明白に記述せられて居る。而して彼の陸軍大學校の梅崎兵學敎官は此大隊の實例を證據として、戰闘の堪能力に就て論じて居るがそれが如何にも極めて簡短であるから、蛇足の樣ではあるが評者はそれを敷衍して、今少しく讀者諸君に研究の材料を供給し樣と思ふ。抑〻軍隊が幾何の損害を受け幾何の死傷に達したならば戰闘が不可能になるものであるかといふことは、これは頗ぶる複雜したる大難問題で容易に解釋し得べきものでないのであるけれども、近頃は何も彼も横にかく數字で證據だてるのが流行する世の中であるから、評者も一つそれを眞似て生來極く大嫌いな此の數字的の證據を引用して、此

豊田山ニ於ケル第十二師團ノ强襲



九十九道人石原白道畫伯筆

の大難問題を答解して見様と思ふが。元よりこれは決して精確なるものではない、極めて概算的のものであるけれども、亦大に參考に資すべきものである から其おつもりて御覽を願ふ。由來戰鬪に於ける損害は時代の進むと共に漸次に減少して來る傾向を示して居るが、これに對して多くの西洋の兵學者は『兵器が精銳の域に達したる結果、彼我兩軍ともに遠方に於て火戰を交へて餘りに互いに近よらぬから、それで漸次に損害數が減少するのである』といふて居る。成る程古昔の如き短兵接戰を主戰法としたる場合よりは、火器を使用する遠戰はたしかに其損害を減却する筈であるが、併し評者はそれ以外に更に大なる原因があると信ずるものである。然らばそれは何に原因するのであるかといふと外でもない、近世世界各國は競ふて無暗と兵備を擴張して、其底止する所は何れにあるか知れぬといふ有樣。形容てない主義てない事實に於て擧國皆兵を近き將來に實現すべき狀況を呈して來たのは何人も之を否認し得ぬ所てある。此の狂的兵力增加の結果は戰爭としいへば非常に多數な軍隊

がこれに從事する、其從軍したる莫大なる兵力が何れの會戰にも平等均一に戰を交へ得る筈がない、つまりは多い中には全戰役間碌々戰をせずに仕舞ふ軍隊も澤山にある筈である。然るに一方其損害の百分數を例の數字で示す場合には、此の未交戰の不參加の軍隊も總兵力の中へは算入せられる場合が多いのであるから、それが爲めに總計の上から見ると損害の數が減少してゆく樣に見へるのであつて。其證據には日露戰役などでは隨分或一部分に。全滅になつた軍隊の少なからずあつたのは、諸君も現に見聞せられた所であるが。此の損傷の減少なるものはこれを兵器進歩の爲め遠くに於て勝敗が決するのと、軍隊が餘りに度外に膨張したのとの、兩原因から來て居るものと見るのが至當であると評者は思ふ。そこで然らば軍隊なるものが其何割を減じたならば到底戰が出來なくなるか、又何割迄の損害であれば攻擊動作を繼續することが出來るかといふと。バルク將軍は『精良にして戰場に於ては大損害の避くべからざるものであるとの覺悟を豫め堅めて居る所の軍隊は、四分の一の

損害に堪へて能く戰鬪し得るであらふ』といふて居る。元よりそれ以上の損害を受けても攻擊動作を繼續した例はないことはない、彼の有名なるサンプリバーの戰に於て佛軍の右翼を攻擊したる、普の近衞歩兵の一部の如きは其損害が百分の三十以上になつて居るが、それでも攻擊を聊かも遲緩せしむることはなかつたのであるが。併しそれは其隣接したる他の損害少なき軍隊と相連繫して、其協力と其推進とに依つた效能も少なくなかつたとしたならば、獨立して戰鬪するに方つて攻擊を持續し得る損害の程度を、百分の二十五即ち四分の一と計算したのは如何にもバルク將軍の慧眼であらふと評者は信ずる。併しながら今こゝに參考としてそれ以上の損害がありつゝも立派に勝利を收めた所の、近古以來の戰鬪を試に左に列記して、初學の方の御參考に供して見樣。

千七百五十八年八月ッオルンドルフに於ける普魯の戰

勝者たる普軍の損害　％三十二、五

千七百六十年十一月トルガウに於ける普墺の戰
勝者たる墺軍の損害　％三十、八
千八百〇七年二月イーラウに於ける魯普と佛の戰
勝者たる佛軍の損害　％三十八
千八百〇九年四月アーベンスベルクに於ける墺佛の戰
勝者たる佛軍の損害　％三十八、三
千八百六十三年七月ゲッチスブルグに於ける米南北軍の戰
勝者たる北軍の損害　％三十二、五

まだ〳〵澤山にあらふが先づ一寸とした所がこれ位である。これには隨分總兵數の上の違算もあるであらふし、又損害の數の上にも誤りがないとはいへぬから、更に近頃墺國のベルント參謀大尉の著したる、戰爭の統計觀察といふ書物に掲げたる勝者損害の平均百分數をお目にかける。即ち

フレデリック王時代　％二十三、五
ナポレオン帝時代　％十九
魯波戰爭　％十八、五
クリメヤ戰爭　％十五
千八百五十九年伊太利戰　％十三、五
千八百六十六年戰　％十二
獨佛戰爭　％十二、五

これ等の數量は概算てはあるが頗ぶる尊重すべきものであつて、此の統計から概算して見ると四分の一以下の損害ならば、攻撃を持續し得ることは確實てあるといふことが出來樣。

然るに此の豐田龍成少佐の勇戰は如何てあるか、まだ前の戰闘から間もないから其補充も到著して居るか居らぬかの時て、確實なる兵數は知れぬけれども此の大隊の總員は多く見積つても、評者の考ては七百名以上には出て居るまいと考へる。然るに此の日此の戰に於ける同大隊の損害は附錄第九の示

すが如く正に三百五十九人である、たしかに總人員に對して百分の五十以上の損害であつたのは間違ない。其上に此の聯隊の將校の死者五人傷者九人の中で、此大隊に死者が五人傷者が八人あつたのである。斯の様な大損害を受けたにもかゝはらず、頑強無比に攻撃を繰り返して終に目に餘る敵を撃退し、まだそれ而已か其殆んど全員が多少の手を負はぬものはないといふ有様の、僅かなる生き殘りの半數以下の少ない大隊を以て、更に紅砂嶺上の砲兵に向つて突撃を決行せんとしたのは、實に天魔とも鬼神とも稱すべき豊田少佐の健氣なる振舞ひかなと、贊歎稱揚の聲を發せざらんと欲するも得べからず。即ちこゝに我が陸軍は歐洲列强軍の『レコード』を破つて二分の一以上の損害に於ても、尚且つ攻撃を立派に繼續し得たる實證を明示したものである。此の様な勇士が澤山にあつたればこそ日魯戰爭は常に連戰連捷の光榮を收め得たのであつて、評者は實に此の豊田龍成君に對して、國民を代表して衷心から深く感謝の意を表するに躊躇せぬものである。

此の方面は豊田少佐の大隊の勇戰の研究に止めて、さて更にこれから八盤嶺の小倉の歩兵第十四聯隊の評論に移るとし様。大安平の本街道を進んだる歩兵第四十七聯隊は、前に述べたる歩の第二十四聯隊が一氣呵成的に游撃溝嶺から老坂溝を占領してくれた爲めに。大寒坡嶺の敵は少なからず其左側背が危險になつて來たので、浮き足になつた所を折よく正面本道から壓迫したのであるから、左したる大困難を經ずして其目的の大寒坡嶺を占領し得たが。此の歩の第四十七聯隊の左方から宋家堡子を經て金家堡子より八盤嶺に向つたのは、即ち今から研究して見様といふ歩兵第十四聯隊の第二第三大隊であつた。此の聯隊は師團左翼隊たる旅團の豫備として旅團長代理今村大佐(現少將)から其第一大隊を控置せられたので。殘りの二箇大隊を竹下少佐が引率して前進して、先づ第一に第三大隊をして八盤嶺北方の最高地を攻撃せしめたが。敵は堅固なる地形を利用して三線に工事を施こし、重層射撃を以て猛烈に我が志波少佐の第三大隊を苦しめた、剛毅なる志波大隊は少しもこれを恐

れずして、近く最高地より約略百五十米突の地まで進んだが。我は極々狹ま
い正面を占めるの外に、土地險岨にして傾斜急峻なる爲に其戰線を擴張すべ
き餘地がない。これに反して敵は豫め準備したる廣き正面を以て包圍的に我
を射撃したので、殘念ながら容易に前面の敵を擊退することが出來ぬ。斯く
て時間を空しく費やして居る中に、此大隊の左方より前進したる第二大隊は、
其第七、第八中隊を以て金家堡子附近の敵を擊退して。折よくも今此第三大隊
の相對して苦戰中である所の、敵の陣地の東南側に突出せる支脈にとり付い
たが。敵はこれを覺ると共に此の大隊にも烈しき彈雨をあびせかけた。けれ
ども健氣なる第八中隊は一發も之に應射せずして奮進し、他の中隊の開進を
力を盡して掩護した。それこれする中に、第三大隊は漸次に敵の第一線第二
線を破り、八盤嶺最高地の西北にある高地を占領するを得たので、最早夜明
け間際であるから天明にならぬ中に是非敵を擊退せんとして、此所に全力を
展開して鋭意突進せしめ、第十二中隊を以て其後方から掩護射撃を行なはし

めたが。敵の射撃は極めて猛烈にして我は死傷續出し到底突進を繼續し得ぬ
羽目に陷つた。

丁度此の危機一髪といふ場合に其左方に在つて協力して居た第二大隊は、
其第七、第八兩中隊を以て猛然敵を射撃せしめて、第五中隊長たる大尉中原榮
をして其中隊を率ゐて同く最高地の敵に向つて、彼の恐るべき十字火を被む
りつゝ谷地を傳ふて突進せしめたので。こゝに此兩大隊の突擊が偶然的に一
致して、終に此重要なる八盤嶺の最高地を占領し得たのは最早夜の明けてか
ら後であつたが、此の中原榮といふ中隊長は曾て其下士初任時代に自分が部
下として世話をしたことのある男であるが。朴直にして勇猛なる隼人であつ
たが、非常に氣が短かいので度々自分がうれを戒めたことがあるが。彼れは
日淸役に於て幸運にも少尉となりたる後、此の日魯の大戰役で此樣な勇戰を
して美名を戰史の上に遺してくれたのは、實に何よりも自分にとつては難有
い喜ばしい次第である。此第十四聯隊の攻擊に際して敵は步兵操典第二部第

九十五の末文にある如く『一部隊ト雖若シ最高處ヲ占ムルコトヲ得ハ敵ノ動作ヲ觀察スルコト易ク其志氣ヲ挫折セシムルノ利アリ山地ニ於テハ重層射撃ヲ利用スル機會多キモノトス』とある條文を應用して、八盤嶺の最高處に三重の陣地を構成して居たのであつて。其容易に之を攻撃し得べからざるはいふ迄もないのであつたが、之を攻めたる聯隊長代理竹下少佐（現少將）は少しもこれに尻込みせずして。先づ第三大隊を以て其左に迫らせ、更に第二大隊を以て其右を衝かせたる而已か、此兩大隊は何れも其後方に一若しくは二中隊を備へて、射撃を以て其突進を援助せしめたのは頗ぶる要領を得たる攻撃の方法てあつて、即ちこれは歩兵操典第二部第七章第九十六第二項の

『攻撃ノ爲メニハ各部隊ハ成ルヘク死角ヲ利用シテ敵陣地ノ支撐點及緊要ナル鞍部ヲ奪取スルコトヲ勉ムヘシ此際一部隊ヲシテ山上ヨリ敵陣地ヲ射撃シ其前進ヲ容易ナラシムヘシ』

とある原則を應用したものであつて。此の射撃部隊の如何に此様な場合に

必要であるかは、第三大隊は第十二中隊一中隊を以て他の三中隊の前進を援護したが、敵彈雨下の爲めに終に前進を中止せざるを得ざるに至つて仕舞たが。第二大隊は反對に第七第八兩中隊を以て第五中隊の突進を掩護せしめた爲めに、中原大尉の第五中隊は烈しき敵の十字火を被むる谷地を進んだに係はらず、先登第一に此の最高地を占領し得たのを見ても、此の援護射撃部隊の山地攻撃に及ぼす威力の程は推察し得られ様。既に此の最高地を失なつた敵は其左側背には最早歩の第四十七聯隊が進出して居るので、一たまりも支へることは出來ずして終に三家子方面へ潰走したのであつた。

これを要するに我が第十二師團は左右二翼隊の四箇聯隊を併列して、遺憾なき準備のもとに敵に向つて前進して。其右翼隊の左にありし歩兵第二十四聯隊が、敵の防備の手薄なるに乘じて、中央より疾風迅雷的に突進して游撃溝嶺一帶の陣地を占領し、以て大寒坡嶺、八盤嶺に據れる敵の退路を遮斷せんとし。其右方にありし歩兵第四十六聯隊は、垣山及紅砂嶺に向つて頑強無比

なる惡戰を繰返し〳〵強行して、敵第十軍團の唯一の大退路を脅威したので、流石の敵も終に支ふること能はずして徐々大安平方面に向つて退却を始めたが。其機を逸せずして左翼隊たる第四十七、第十四兩聯隊が、大寒坡嶺八盤嶺を無二無三に突撃したので、此の日の内に紅砂嶺より八盤嶺に亘る堅固無双の敵陣地は全く我軍の手に落ちたのである。即ち此の前に述べたる第十二師團左翼隊たる兩聯隊の行動は歩兵操典第二部第九十六の

『山地ノ戰闘ニ於テ攻者ハ敵方ニ通スル道路、谷及稜線ヲ利用シテ前進シ以テ敵ヲ包圍シ若ハ遠ク迂回シテ敵ノ背後ヲ脅威シ其退路ヲ遮斷スルヲ必要トス』

とある條文の通りを最も巧妙に應用したるもので、此の合理的なる右翼隊の戰闘が全師團の勝利の上に非常に大なる效果を持ち來したのであつて、これ實に評者が其攻撃の施行に就いて大に稱賛する所であるが。惜い哉其全砲兵の使用法は前にも度々述べたる如く、極めて適當にあらずして無遠慮に申

上げればそれが甚だ拙劣であつた爲めに。相當敵に優る有力なる砲兵を持つて居りながら、頭さへ出せば直ちに敵砲の爲めに制壓せらるゝといふ、不利益なる狀況に陷つたのは遺憾千萬なことであつて。爲めに此の方面の攻撃の進捗に多大の障碍を來したのは、蓋しこれ疑ひもなく此戰の唯一つの過失である、況んや師團からあれ迄の注意があつたに於てをやである。

まだ〳〵いひ殘したことはあるが我軍の方は先づざつと此邊で切りあげて、更に今から露軍の行動に就て簡單に一二の短評を加へて見樣と思ふが。何分にも青島や歐洲の新戰報が頻々として飛んで來て、評者の耳目を眩惑し擾亂するので、沈著しておつと此評論の筆を執ることの出來ぬのは實に遺憾である、がこれも時世で已むを得ぬ次第であると偏へに御容赦を願ひたい。

露軍の評論に移る前に今一ついひ殘したことを附け加へて置くが、歩兵第十二旅團長は今村信敬大佐が代理をして居たのであるが、丁度此の戰の迫つ

た頃に島村少將が任命せられて著任した。けれども此の戰は夜間に敵に近接して、拂曉に於て敵の主要陣地を奪略するといふ、極めて戰況地形に精通して居る隊長の指揮を要する場合であつたので、永らく敵と相對峙して土地の案內に熟達し且つ此の夜戰を計畫し準備したる、今村旅團長代理をしてこれを指揮せしめて、本物の島村旅團長は此の戰鬪を見學したが。これは實に最も至當なる處置であつて、戰鬪の中途半で其指揮官を交代せしむる樣なことがあつては、到底計畫通り思ひ通りの戰は出來ぬ。であるから此樣な場合には前任者も後任者も、最も其心を公平無私の所に落ち著かして、唯々戰勝を收めるに最も有利なる位置に立つ人が其指揮をとるがよい。又其上官たるものは此の戰に於けるが如く、適當に其交代に關して前後兩任者に注意を與へることを忘れてはならぬ、此時の此の處置は評者は大に同意である。

さて愈これから露軍のことを研究するが、前にも既に述べたことがある通り、敵の東部兵團長ビリデルリング大將は頗ぶる風采の堂々たる人であつた

が、それは全くの見かけ倒しであつたらしく、甚だ其作戰の計畫は拙なかつた模樣である。であるから此の寒坡嶺の戰の直前即ち二十五日の夕に於て、日本軍の大部分は東南方にありと判斷して、少しも此の第十二師團方面には顧慮することなく、合家堡子方面から大兵力を以て攻勢に轉ぜんとして其命令を下したので。此方面にありし第十軍團は其兵力の大部分を此二十五日夜に於て、次溝附近に集合せしめつゝあつたのである。からして敵が此の我が第十二師團方面に備へた數は頗ぶる微弱であつて、オルヘリアニ少將は步兵三大隊、騎兵一聯隊と砲二門とを持つて七、八兩盤嶺を扼し。カバエフ中佐は同少將の指揮を受けて別に步兵二大隊を以て大寒坡嶺を守備して居た。而して其左方紅砂嶺附近にはクレンボフスキー大佐の率ゐる步兵三大隊、騎兵二中隊、砲六門が堅固に陣地を占め。其左に當たる第十軍團最左翼の朴溝北方高地には、同大佐の部下である所のソコロフ中佐が步兵五中隊、砲二門を持つて、軍の最左翼の押へとして控へて居た。即ち我が第十二師團の全正面に第一線と

して備へたる敵の總數は、七、八盤嶺に歩兵三大隊、砲二門、大寒坡嶺に歩兵二大隊、紅砂嶺に歩兵三大隊、砲六門、朴溝北方高地に歩兵一大隊强と砲二門。合計歩兵九大隊と砲十門があの廣大なる正面を守備したのであるから、其兵力が到る處で微弱であつたのはいふ迄もない。而して其他の第十軍團の主力は明朝攻撃に轉ぜんとして、次溝附近へ夜を冒して集合最中であつた八月二十五日夜半頃に、思ひがけなく反對に我軍の攻撃を受けたのであるから、敵の狼狽周章のし方は實に筆にも口にも盡せぬ程であつて。其大失態の原因を探求して見ると蓋し總大將たるビリデルリング大將の伎倆が其風采の如く堂々たらざりし爲めに、大切なる敵情判斷を誤まつて、東方面の備へを薄弱にし過ぎたのが主因であるといはねばならぬ。

即ち此の敵の防禦陣地に對して我第十二師團は、其最右翼の歩兵第四十六聯隊と砲二門を以て、敵の紅砂嶺の歩兵三大隊、砲六門と朴溝の北の歩兵一大隊、砲二門とに當り。歩兵第四十七聯隊を以て大寒坡嶺の歩兵二大隊を攻め、

更に歩兵第十四聯隊を以て八盤嶺の歩兵三大隊と砲二門に對したのであるから。其兵力は殆んど彼我大なる差はなかつたけれども、此の外に我が歩兵第二十四聯隊は全く其前面に敵なき化事孤子方向から、何の苦もなく敵の中央を突進して其側背を脅威すべき、游撃溝嶺一帶の高地を速に占領した。そこて前からは歩兵第四十七聯隊と後備歩兵一大隊とに迫られ、其左側背には歩兵第二十四聯隊に迂回せられたるカバエフ中佐の二大隊は、兵力微弱にして到底大寒坡嶺を守り切れぬといふことをオルベリアニ少將に飛報し、同少將は其後方に控置して豫備としたる哥騎兵を急遽之に增援せしめたが。其兵力の懸隔は如何にするも此の大寒坡嶺を守りをほせ得ずして、忽ちにして三家子方向に退却せざるを得ざるに至つたので。八盤嶺の堅固なる陣地に比較的大兵を握つて、我が第十四聯隊を瞰制して居たオルベリアニ少將の歩兵三大隊、砲二門も、全く側背を明けばなしにせられて不用心千萬の狀態に陷り。終にこれも前同樣徐々に三家子附近の陣地に退却せざるを得ざるに至つたが。

これ蓋し此重要なる孤家子―大安平の本街道に僅々二箇大隊を置いた而已で後方に大なる豫備も備へず。日本軍の主力は東南方にありとしたる東部兵團長ビリデルリング大將の誤まれる敵情判斷を眞に受けたるオルベリアニ少將は。其主力たる歩兵三大隊、砲二門を八盤嶺の細道の方に備へ、紅砂嶺と大寒坡嶺の間には約略一里程の空隙があるにも頓著せず、頻りと南の方に而已氣をとられて居る中に、我が福岡歩兵第二十四聯隊に忽ち其背後まで侵入せられて仕舞たのであつて。これ蓋し其主たる敗因は總大將の手腕の平凡であつた爲めてあるが、併しオルベリアニ少將も餘りに東方に對して油斷をし過ぎたといふ罪は、到底辭退することは出來まいと評者は思ふ。

若し此の場合此のオルベリアニ少將が、歩兵五大隊、騎兵一聯隊、砲二門、獵兵三隊を以て延長約二里に近き、七盤嶺から紅砂嶺の間を守るとしたならば如何にするのが至當てあるか。これ實に難問題である容易ならざる重荷てあるが、既に總大將のやり損じからして此樣な大任務が其肩の上に落ちて來たと

したならば、評者は左の如く配備して此の東方面の日本軍に備へ樣と思ふ。

即ち歩兵一大隊、獵兵一隊を八盤嶺に出し他の一大隊、獵兵一隊を王家堡子西南方約千米突の高地に出し、此の兩大隊を以て左右の友軍と連絡を取らしめて兩翼を警戒せしめ。大寒坡嶺は矢張歩兵二大隊と獵兵一隊に守らせて之に砲二門を加へ、歩兵一大隊、騎兵一聯隊を其後方に豫備として此の全正面を警戒する考てある。勿論これでも歩兵三聯隊、砲兵一大隊の攻撃を受けた場合には終には到底支へ能はぬ迄には至るてあらふが、去りとて歩兵第二十四聯隊をして無人の境を進ましむる樣な過失を犯して居らぬから、相當に此の八盤嶺。大寒坡嶺の線て第十二師團の主力を一時苦しませる位の藝當は出來ると思ふ即ち此の方面の防禦は其兵力が其陣地に比較して非常に寡少てあつたのが、第一の敗因てあつてこれは當然ビリ大將の背負ふべき責任てあるが。更に山地戰の原則に餘りに拘泥し過ぎて、寡兵を以て本街道と八盤嶺街道とを守り其左方約一里を全く明け放しにしたのは、これオルベリアニ少將の犯したる

過失である。が併し退ぞいて考へて見ると或はこれは怨すべき程度のものではあるまいか、故如何にとなれば其線面は非常に廣くして到底兵力がひつばり足らぬとしたならば、それを平ら一面にばらまくといふのは頗ぶる智惠のない骨頂であるから、即ちそこで古來山地戰の原則として遵守し來つた所の主要なる道路を守備して其他の山地をあけて、置くの處置を採用したのであつて、これ實に已むを得ざるに出たものであらふ。左すればオルベリアニ少將の罪は頗ぶる輕減せられて來て、敵情を誤判して無暗に東方面の防備を手薄にしたる手ぬかりは、其罪を殆ど全部ピリデルリング大將が、其双肩に負はねばならぬことになるのである。

第十軍團長スルチエフスキー中將が二十五日の夜、其豫備隊の全部を擧げてワシリエフスキー少將に率ゐしめて、次溝附近に集合して攻勢に轉ぜんとしたのは東部兵團長の命令によつたものであつて、其處置の當否は一に東部兵團長の負ふべき責任であるから、これに就ては此の中將は頗ぶる關係が薄いのであるが。此の中將が其東方面の防備を攻勢移轉の爲めに減じたに關はらず、其左翼の最要害地たる所の紅砂嶺及び垣山並びに朴溝には、依然步兵四大隊、砲八門を備へて嚴重に守備せしめたのは頗ぶる至當なる處置であつて、若しも此のクレンボフスキ大佐支隊がなかつたならば、露の第十軍團は全く其退路を遮斷せられるに至つたに相違ない。斯くまでも大切なる此の左翼の要地を慧眼看取したるスルチエフスキー中將は、其兵力の大部を擧げて合家傘子の方面から攻勢を執るといふ場合にも、聊かも此の左翼の支隊には手を付けなんだので。我が步兵第四十六聯隊の豐田大隊が、殆んど想豫も出來ぬ程なる大勇戰をなし、三回も四回も果敢なる突擊を繰返したるに係はらず、敵は少しも其陣地を動かずして二回迄も大逆襲を決行して、非常に其兵力は損傷したけれども、爲めに第十軍團をして退路を失なふの危險に瀕せしめなんだのは、此の第十軍團長の配備が適當であつたのと、更に此の支隊長たるクレンボフスキー大佐が、我が豐田少佐と匹敵すべき程の勇將であつた爲め

てあつて。敵は左翼端なる毛石溝東南方標高六三九高地と、此最左翼端たる紅砂嶺附近の陣地との、兩翼端の頑強を極めたる防戰の爲に、一時其戰線を後方に退ぞけたるに係はらず其儘で我第十二師團に對して、更に大に剛性に防戰を試みんとし得たのは、全く此の兩翼隊就中此の左翼支隊の勇敢なる防禦のお蔭であつたのであるが。流石剛毅なるソコロフ中佐もクレンボフスキー大佐も、或は傷つき或は戰死して終に此要害を保ち得ぬ程に、我が步の第四十六聯隊の爲めに苦しめられて終に此の陣地を棄てたので。忽ちにして此の第十軍團の毛石溝東南から大安平を經て朴溝北方に亘る陣地を撤して、遠く遼陽に向つて退却せざるを得ざるに至つたのであつて。之を要するに露軍は全く少しの天祐もなくして、大兵力を東南方に集めて攻勢に轉ぜんとする準備最中に、我が第十二師團の强大なる攻擊を、其攻勢準備の爲めに極々手薄になつたる東方面から決行せられ。其配備の手薄なりし所から步兵第二十四聯隊に其中央を突破せられて、これが抑〻第一番に敗戰の主なる原因を作り、

其後方に退ぞいて陣地を占めて、其兩翼の勇戰の爲めに一時此の第二陣地を固守して見たが。我が豐田龍成少佐の勇氣がクレンボフスキー大佐に優越した爲めに、終に敵は其砲六門を破壞して陣地を棄てざるを得ざるに至り。大安平、松泉寺にありし軍團豫備隊の全部を、殆んど之が應援に使ひ盡したけれどもこれを恢復し得ずして、此夜の中に遼陽に退却せざるを得ざるに至つたのは。蓋し其失敗の罪は全く最初に於けるビリデルリング騎兵大將の敵情判斷を誤まりて、其東方面を微弱なる日本軍しか居らぬと見くびつたる過失から生じたものと評するのが至當である、步兵操典第二部第三に曰く

『高級指揮官ハ諸情報ト自己ノ觀察トニ依リ戰鬪一般ニ關スル決心ヲ定ム、即チ如何ニシテ攻擊スヘキヤ防禦スヘキヤ或ハ持久戰ヲ爲スヘキヤ等是ナリ之カ爲メニハ周到ナル思慮ト迅速ナル決斷トヲ要ス戰鬪ノ效果ハ一ニ懸リテ其當否ニ在ルモノトス』

と實に至言である全く間違ひはない、東部兵團長が我が日本軍の敵情判斷

を誤まりて、全く賽馬集街道から而已其主力が進來するものとして、此方面に而已兵力を集めた爲に、忽ちにして其隙きに我が第十二師團に乘ぜられて、我が日本軍に優るの大兵力を有しながら、をめ〳〵として遼陽に向つて退却するに至つたのは。全く此の決心が敵情誤判の爲めに不當であつたのゝ致す所であつて、これを除却しては此の方面の露軍は中々勇敢に且つ適當に戰鬪したものと評者は思ふ。

久し振りに散漫になり冷却し易き頭腦をしぼつて、此の拙ない原稿をやつとのことで書き終らんとする時、戸外何となく唯ならぬ騷しさに、すはや敵こそ御參なれと筆なげ棄てゝ飛び出して見ると、紅燈萬點萬歲の聲は小なる關西の一都市を震撼せしめた。いふ迄もなくこれは青島の陷落であつて、何よりも實に嬉しい喜ばしいまた實に芽出たいことであつて、大正の御代第一番目の始めての大手柄である。乍去思へ諸君これは大兵を以て彈丸黑子の孤城を攻めたのである、語弊はあるか知れぬが勝たねばならぬ戰である勝つが

至當であるのである。此の樣な戰に勝つたとて强國獨逸を負かしたなどゝ、決して鼻を高くする樣なことがあつてはならぬ。我は全く勝つが至當の道理であつて、彼は即ち陷るが當然の運命である。何も不思議はないのである此樣な小勝に驕慢心を起す樣な根性では、到底我が日本は富國にも强兵にもなれぬと覺悟するがよい。但し斯くいふはいふものゝ自分は二十年來胸につかへた溜飮が、一度にぐつと音をして快よく下がつたのは事實である。讀者諸君もさうであらふ必ず左あるべきであると評者は思ふ。それは果して何の爲めであるかいふ迄もなく、臥薪嘗膽日清戰役の後に血涙を流したる、當時の無念さを追懷したならば如何に此の小勝が嬉しく且つ痛快であるか知れぬ。自分は此の意味に於て即ち三國干涉の復讐を成效したる意味に於て、忽ち此の原稿の筆を拋つて紅燈萬點裡の一人となつて、狂喜する諸人と共に萬歲萬歲を連呼した絕叫した、萬歲！

大正三年十一月二十二日印刷
大正三年十一月二十五日發行

不許複製

戰史評論奧附

著作者　無名戰士

發行者　東京市麹町區平河町四丁目十一番地　宮本林治

印刷者　東京市芝區櫻川町十七番地　山田三次郎

發行所　東京市麹町區平河町　宮本武林堂

振替東京一〇九一二

加風居士著　●代金は前金を振替口座へ拂込みを乞ふ

戰史摘例

步兵操典證解

全三冊

價一部　四圓五拾錢　毎冊　壹圓五拾錢　內地郵稅　一部二十錢　毎冊拾貳錢

第一卷（綱領、第一部）　第二卷（戰鬪一般ノ要領、攻撃、防禦、追撃及退却）　第三卷（夜戰、持久戰、山地、河川、森林、住民地ノ戰鬪、他兵種ニ對スル步兵ノ動作）

總紙數千三百餘頁
引證戰例戰話約六百條
戰鬪實況繪畫六十葉
地圖戰圖大小五十二枚
製本本綴洋布製最美本

我操典の條項は本書により頗る易解且つ耽讀手を釋く能はざる好讀物と一變し了れり、即ち其意義を講釋する爲めには、快刀亂麻を絶つ底の筆鋒を揮ひ、更に其理由を證明する爲めには內外古今多數の戰例就中日露の最新戰役を、最も多く最も適切巧妙に引用し、一々不動如山の大鐵案を下し、一旦其原則の生ずる所以の根原を知得せしむる而已ならず、內外有名な戰書の尤物多數を網羅して一層讀者の興味感激を甚深ならしめんと勉めたる我日本は勿論殆ど世界萬國にも其比類を見ざる良著と稱する疇躇せず、果せる哉本書を一讀せば、當時の英國大使館武官ベルネ井ツ男爵及佛國大使館武官ベルタン大尉は何れも大賛辭を贈りて、著者が多大の勞力に酬いられたり、寔に必讀の最好著なり。切に愛讀を冀ふ。

發行所　東京市麹町區平河町二ノ九　宮本武林堂

豫告

十二月刊行

戰史評論　爾靈山の攻略

戰史評論

大正三年十二月(爾靈山攻略)

宮本武林堂發行

大正
4. 1. 13
内交

●戰史評論の合本綴方に就て

一、とびらを巻首に付けること。
二、目次を第十一回の首めにつけること。
三、奥付は第二十回のものを其儘用ゐること。
四、毎回の表紙を取り離すこと。
五、以上の如くして十回分を一纏めとして之を表紙を以て蔽ひ、次ぎに適宜の紐をお
もて表紙より裏ら表紙に通し、次ぎに之を交叉して更に裏ら表紙よりおもて表紙
に返して緊く結ぶこと。

●戰史評論第三卷の續刊に就て

戰史評論第二卷は本第二十回を以て完了につき、第三卷を大正四年一月より前卷と同
樣の方法によりて繼續發行す、就ては切に引續き御愛讀を希ふと同時に前金切の諸公
は御拂込(前金は十回分貳圓後金は郵稅共一回二十二錢)みを乞ふ、若し御購讀中止の諸公は直に御通報を希上
候。

戰史評論

第二十回　爾靈山の攻略

無名戰士評
成仁武夫補

朔風枯林を拂ふて風景落寞を極め、山容何時となく瘦せて忽ち骨の稜々たるを現はし、溪流自然に細り來つて水落ち石出づる初冬の際。常に我々の腦裡に深酷なる追想の感を惹き起すものは、往にし日露戰役に於ける彼の爾靈山の惡戰の記憶である。今やカイゼルが東洋に於ける金城湯池として世界に誇りたる靑島も、昇る旭の赫々たる光に向ふ野末の霜のそれよりももろく、比較的容易に我が神尾將軍の手に落ちたる今日此頃、更に一段の緬想感慨を深からしむるものは、實に此の爾靈山の比類少なき激戰である。勇闘である。

いてや今から此の前古無比なる大奮闘の有様を研究して、青島の奪取が如何にして彼の如く容易にして、爾靈山の攻略が何故に此の如く困難てありしかを考察して見るのも、決して無益なる時機に適せざる紙上の空論てはあるまいと思ふ。まして況んや西歐大陸は今や億軍兆馬龍驤虎騰飛奔馳突の眞最中てある、何時又其飛沫が再び我々の足許へ、否々頭の天邊へ飛びかゝらぬとは斷言の出來ぬ大變な場合。餘事はさて置き戰史の研究は、此の目前焦眉の急の爲めにも是非ともせねばならぬ要件てある大事てある。そこて評者は此の評論の第二卷の丁度末尾に當る第二十回に於て、此の爾靈山の攻略を研究することにしたのてあるが、何分にも筆陣甚だ振はずして文勢意の如く働かざる評者が今日の境遇ては、讀者諸君も頗ぶる物足らず思はるる節々の多いことてあらふと思ふが。巧遲よりは拙速が軍人としての本目的てある以上、巧妙なる評論を書かんとして空しく時日を費やすの愚に陷らんよりも、拙なくとも一氣呵成に自己の心中に懷抱したる考を臆面なく諸君の前に披瀝吐露

するのも、強ち無益な無駄事ではあるまいとのこぢつけ理窟から、左に愈〻爾靈山攻略に就て研究を開始する次第てある。前口上は先づこれにてお仕舞として、さらば今から本題目の評論に移ることにし様。

十一月の二十七日乃木第三軍司令官は、今現に實行の最中てある第三回總攻撃の要塞本攻撃方面の成績頗ぶる不良にして、此日も其前日の二十六日も各師團共に逆境に立ち戰況思ふが如く進捗せず、繰り返し〳〵決行したる前日來の各師團の突撃は、徒らに我軍に多大の損傷を增加したる而已にして、却て悉く無効失敗に歸したる所から。敵諸堡壘の强度は現在の様な我砲撃のやり方や又は攻撃諸作業の有様ては、到底容易に要塞陷落の目的を達し得べからざるを痛切に覺つた。

此に於てか勇猛果斷萬人に超絶して且つ戰機を見るに敏なる乃木大將は、直ちに本攻撃正面に於て現在實行しつゝある總攻撃を斷然として中止せしめて、碾盤溝の諸攻城砲兵と第一師團とを以て爾靈山を略取すべく決心した。

これぞ即ち慘怛酷烈を極めたる空前絶後の爾靈山大惡戰の初幕であつて、此の乃木軍司令官の決心は果して至當であるか否か、これ實に此の爾靈山攻略の戰鬪に對する根本的の問題である。評者は實に此の場合此の乃木大將の決心は、頗ぶる勇敢にして且つ最も時機に適切なるものであつたと思ふ。これに就ては隨分異議の申立てをする人々も多いことであらふと思ふから、今から少しくくどい樣ではあるが評者は其適當なる所以を論じて、以て讀者諸君の御意見の程を伺ふことにし樣と思ふ。

此時此際乃木大將の立場は實に非常に困難であつた、高慢なことはいふが實際要塞戰などには全然經驗を有せずして、獨佛の飜譯書の上で其やり方を見たばかりの我が日本の軍人どもは。日淸戰役で非常に手輕く旅順を陷落せしめ得た所から、手前勝手の味噌汁が天上して仕舞、其敵の實質の良否如何を考へずして、要塞なるもの丶價値を頗ぶる輕視した。油斷するもの丶失敗し驕るもの丶久しからざるは古人のいふた如く眞理である、要塞戰の眞味を

知らぬ癖に生意氣千萬にも我々日本軍人は、天から要塞なるものを侮どつたのである馬鹿にし切つたのである。御多分にはもれず此樣な大なる過失に陷つたる我が第三軍は、露人が難攻不落を以て世界に誇つ丶あつたる旅順の本防禦線に對して、輕卒千萬にも野戰と同樣に過早過急に大總攻擊を企だて丶、悲慘極まる大惡戰を繰り返したる後に、多大の犧牲を拂つたる而已で全く其攻擊は失敗に終つて仕舞た。此の大失敗は少なからず此軍の攻擊進捗の上に打擊を與へて、初めて要塞戰なるものゝ眞味の頗ぶる辛い苦いものであることを知つたる第三軍は、こゝに始めて無謀なる總攻擊の到底効果を奏し得ざるを悟つて、愈〻こゝに正攻法を用ひて此の要塞を攻擊し始めたのであるが。初天邊第一番に受けたる總攻擊の大瘡痍は容易なことては全癒せず、其影響は八方に及んで爲めに其正攻法の進行も、思ふ樣には中々工程が進まぬのである。

然るに一方に於ては露軍は非常に多くの軍勢を奉天方面に增加するの確報

あると共に、他方に於ては敵の大平洋第二艦隊は日一日と旅順に近接してくる有様となつた。そこで速やかに旅順を陷落せしめて我全艦隊を永々の封鎖勤務から解放して、充分なる修繕と整備とを加へたる後、これを以て彼の名高い敵の第二艦隊を勇ましく迎へ撃たしむると共に。旅順包圍に使用しつゝある乃木大將の指揮下にある所の、第一、第七、第九、第十一の四箇師團を擧げて、沙河方面に敵と對陣中なる我が滿洲軍の主力に加へて。一擧にクロパトキン將軍に對して先制の利を占め、敵を速に奉天以北に擊退するのが最も必要になつて來た。此兩樣の退つ引きならぬ理由からして、大山元帥は一刻も速に旅順を陷落せしむべく乃木大將に希望する、畏れ多くも英明文武にわたらせられたる　明治天皇陛下からも、一層努力奮勵し速に敵城を攻略せよとの勅語を賜はるといふ有樣。更に他の一方に於て全國民は其攻略の遲延するのをもどかしがり齒痒ゆがつて種々樣々なる惡言を放ち、第三軍の實力を疑ふといふ樣な非常に憂ふべき現象を見るに至つたのは事實であつて。此際此時

此軍の司令官たりしは誰れあらふ、至誠一遍正直一徹の乃木大將閣下である。其心中の苦痛煩悶が如何に甚深甚大であつたかはいふを待たぬ。人より遲れたり人に催促されたりするのは死ぬるよりも嫌いであつた大將のことであるから、此の大山總軍司令官の訓令や、此國民の嘲罵嗤笑の度毎に如何に慚憤せられたであらふか。まして況んやこの精忠至誠比類なき忠義の外に何等の希望も慾念も有せざりし所の將軍が、其衷心より尊信崇敬せらるゝ所の明治天皇陛下から、一層努力せよとの勅語を賜はるに至つたのであるから。思ふに乃木將軍は居ても立つても居たゝまらぬ程に、苦心斷腸の極度に達しられたのは決して察するに難くはない。そこで一日片時も速く〳〵と急ぎながらも焦りながらも、さりとて無暗に人命を損してはとこれも一方ならず心配して、我慢して正攻作業を進め樣とすれば運の盡き土地は全然大磐石といふ大難工事、一尺の攻路に一日を費やし容易に敵に近接することが出來ぬので。氣の急くまゝに大略六七分通り其作業を進めて、種々樣々の大口徑の大砲ま

ても持ち出して、猛烈至極の大砲撃を行ふたる後に於て、一挙全要塞を奪取せんと計畫したる第三回の此の總攻撃も。何回突撃を企だてゝ見ても何れも其効果を收め得ずして、到底容易に此本攻撃正面の敵壘を奪取することは出來ぬと知れた此廿七日、敵艦隊の近接を報ずる歐洲よりの確報と共に、更に再三の大山元帥よりの催促狀を手にするに至つたる乃木將軍の立場に身を置いたならは。何人と雖ども旅順要塞の鎖鑰たる爾靈山攻略といふ方案を立てゝ、非常なる果敢なる決心を以て此の爾靈山を無理やりに奪い取るといふ手段に出るの外には、如何に考へるも時機に適切なる妙法はあるまいと思ふ。時間に餘裕があるとすれば勿論如何なる手段も方法もかけぬことはないが、時日の切迫した上に敵は愈〻近づくといふ大急場である、何として此以外に詮方があらふや。

抑〻爾靈山の位置及高度たるや、此方面に於ける群山中に於て最も秀拔したる高き標高を有し、殆んど旅順全港内は此山上からは見へぬ所はないといふ

展望自在の高地である。先に我軍が南山坡山を占領してこれから軍艦射撃の觀測を行ふたる爲めに、敵の苦痛は其極に達したけれども。此の山の高さが全港内を見るには少しく低く過ぎた爲めに、白玉山南方の海面に隱匿して仕舞たのである。それ以來といふものは我が重砲が非常に苦心をして探り撃ちをするけれども、高價な大彈丸を費やすばかりで充分なる損害を敵軍艦に加へることが出來ぬ。假令破れたりと雖ども此の軍艦が殘存して居る以上は、封鎖に任ずる我艦隊は旅順附近の海面を監視する必要の爲めに、充分に新來のバルチック艦隊歡迎の準備をすることが出來ぬ。これ實に頗ぶる重大問題であつて我が大日本全海軍の全く死活の問題である。此の重大なる問題の答解は港内深く逃げ込んで姿を見せぬ軍艦を射撃する爲めに、直接其碇泊して居る位置を望見し得る觀測所を設けるのが、此の場合最も適當なる運算法の手始めであるのである。然るに前にも述べたる如く此の爾靈山高地なるものは、旅順

港の西方に峙立し巍々として天をも摩せん勢を示し、此の山上からは充分に敵軍艦の退避せる海面を望見し得るの望が充分ある上に。此山は敵も油斷して由來大なる防禦工事がして無かつたのであるが、先に第一師團がこれを强襲して以來敵も其最重要なるを始めて感著いて、急に之れに工事を施した樣な次第であるから。地形は非常に險峻ではあるけれども、永久式の大築城を正攻する程な困難はない、否々隨分困難はあるとしても敵も亦た我れと等しく大なる損害を被むるのは當然である。永久築城を攻める場合には敵には損害は極めて少なくして我れ而已大なる損傷を受けるのが常であるが、此の爾靈山は彼の工事も近頃から始めた野戰築城の少しく堅い位のものであるから、これを攻むるに方つては我にも損害のある代りには彼にも隨分と痛い目を見せることが出來る。即ち彼は包圍中にあるのであるから一人を減ずればそれが最後で、最早何としてもこれを補充することは出來ぬのであるが。我軍はこれに反して常に新手を以て之を補充し增援し得る。即ち敵要塞は容易に正

面よりの正攻では陷ちいらぬとした場合には、全港内を瞰制し得べき此の高山の山巓を占めて、此處から敵の軍艦の殘存したるものを悉く粉碎する如く、巧みに重砲射擊の爲めに觀測をしてやると共に。此旅順要塞の死命を制すべき爾靈山を我軍が攻擊すれば、敵の全力は必ずこれに集注せられて、其不完全なる工事のみなる狹隘な山上は人を以て埋まるに至るは目前である。然る場合にはこれを攻むる我軍も勿論大損傷のあることは覺悟せねばならぬが、敵も我と大なる差異なき大損害を被むるは當然である。果して然らば敵を自滅の域に漸次に近づかしめる方の利益もある。勿論隨分これは非常手段ではあるが已むを得ね、場合が非常中の大非常なる場合であるから、我に幾分たりとも利益あるの手段方法は悉く之れを利用せねばならぬのはいふ迄もあるまい。こゝに於てか乃木將軍は斷然として見込みのたゝぬ本正面の總攻擊を中止して、直ちに其重砲の全部と第一師團とを以て爾靈山を攻略せしむるに決心して、即時に其命令を下したのであつて。其決心其處置共に非常に大膽

にして巧妙とはいへぬけれども、時機切迫の非常の場合に取つては、此外には如何にしても瞬時も早く、敵軍艦を全滅せしむる手段がない、其手段がないとして見れば損害や困難はいふて居れぬ、拙なしと雖へども何ても彼ても直ちに其實効を擧げ得るの策を建てるの外には道がない。これ實に乃木大將閣下が爾靈山攻撃の決心を堅めたる所以であつて、評者は此場合此の乃木大將の決心は最も適當なるものであつたと稱するに躊躇せぬ、是れ實に歩兵操典第二部第四に掲ぐる所の

『凡ソ戰鬪ニ關スル各級指揮官ノ決心ハ任務、地形及敵情ノ判斷ニ基クモノナリ然レドモ任務ハ決心ノ基礎ニシテ地形ノ不利、敵情ノ不明等ニ依リテ蹉躓スベキモノニアラズ』

とある此の戰鬪の原則を遵奉して時機に適切なる決心をなしたるものである。此場合に於ける乃木大將の主要任務は何であるかといふと、片時も速に旅順港内に蟄伏する敵軍艦を全滅せしめて、我が日本全艦隊をして近接し來

るバルチック艦隊に對して、充分なる迎撃の準備をなすの時間の餘裕を與へる樣にするにある。更にこれに次て重要なる任務は速に全要塞を陷れて、其四箇師團の大兵力を以て沙河方面の滿洲軍の主力に合し、猛烈なる攻勢を取つて敵を奉天以北に擊退して、再び起つ能はざる如く大打擊を加へる爲に加勢をせなければならぬのである。即ち一刻片時も速に全旅順を陷れねばならぬが、若しそれが出來ねば其港内にある軍艦だけでも速に全滅せしめねば、乃木大將の任務は全く果し得られぬのである。

今や敵の第二艦隊は十二月中に旅順に著するといふ噂の如く、時々刻々我國に向つて近接し來ると共に。北方黑鳩公將軍の指揮する敵の大軍は、日夜其運搬力のあらん限りを盡して、其兵力の充實に熱中して居る形勢である。此場合旅順の陷落が一日でも早ければ、其早いだけ我が海陸軍兩方面ともに、益〻其前面に控へたる敵に對して豫め準備を整へるの日時の餘裕を多く得られ、隨て充分なる仕度をなして敵を擊破することが出來るのであるが。若しもそ

れに反して此旅順が陷落せぬ中に、敵が我軍に進み迫つて來たとすれば、海陸軍ともに腹背に敵を受けるといふ大不利に陷るのは目前。とり分け海軍に於ては全く半年間も封鎖勤務に日夜努力した爲に、船の修繕も其掃除も少しも出來て居らぬ此の場合。大敵が其背後から進來する而已か、死に瀕したる旅順の敵軍艦は之れに勢を得て猛然突出し來るべきはいふ迄もない。斯くなれば其勝敗の如何は申上げる迄もないことであらふ。即ち一刻も猶豫せずして旅順の敵艦を擊沈せねば我に危險が刻々に迫るのである。如何なる困苦如何なる危險を冒して迄も少くも敵の軍艦だけは沈めて仕舞はねば、我海軍が敵に對して優勝の位置どころか、對等の位置にも立つことが出來ぬのである。

任務が既に前に述べたるが如くであつて、敵情が現に今述べたるが如き有樣であるとしたならば、これが爲めに如何なる方法を取り如何なる處置に出てたらばよいか。いふ迄もなく如何なる大困難如何なる大惡戰を決行してなりとも、片時も早く敵の港內の軍艦を擊沈するの策を立てねばならぬ。それ

が爲めには今現在の有樣では到底正面の本攻擊方面では、まだ〳〵正攻の諸準備が不充分であるから、如何に此方面から强襲無理押しを繰り返しても到底成効の見込が立たぬ。左すれば此全港內即ち敵の軍艦の隱遁所を、一望の下に瞰下し得る所の彼の爾靈山高地を速に奪略して、此所に重砲射擊の觀測所を設けて一氣に敵艦を擊沈する外に策がない。勿論それは隨分と困難であらふ、如何にも無理なるやり方であるかも知れぬ。去りながら『任務ハ決心ノ基礎』である以上は、地形の不利にして此方面の敵情が不明であつても、それが爲めに逡巡して全軍の大事を逸し去らしめては大變である。こゝに於てか乃木大將は斷々乎として爾靈山の攻略を決行するの決心を堅めたのであつて同將軍が陣中に於て詠じたる彼の爾靈山の詩に

爾靈山險豈難レ攀。男子ノ功名期レ克レ艱。

といふてある如く、其地形は極めて不利であつて其困難は頗ぶる絕大であるのは、大將自身も此の詩の示すが如く始めから承知して居たのであるが、

自己の受けたる任務を達成するといふ決心の前には、地形の不利も敵情の不明も決してこれを左右すべき餘地を有せぬ。からして同大將は如何なる大惡戰大苦闘を何十度くり返しても、是非〳〵此の爾靈山を攻略せねばならぬと決心したのであつて、評者が此の場合に於ける第三軍司令官の決心は、極めて至當であつたといふのは實にこれあるが爲めである。何人と雖も此の原則を熟讀玩味して詳かに此の場合の狀況を考合せて見たならば、乃木大將の此の決心に對して喙かも不同意を唱へることは出來まいと自分は思ふ。此場合若しも躊躇逡巡して速に決心が出來なんだとしたならば、旅順の陷落は愈〻益〻其時日を遷延するといふことになり、爲めに終には奉天會戰迄に第三軍が北進加勢することも出來ぬ樣な羽目になり。又一方日本海々戰迄に我各艦隊が諸準備を整頓するの餘裕がなかつたかも知れぬ、左すれば其結果たる智者を待たずして知るべきなりてある。決して〳〵好運は我軍に向はなんだに相違あるまい。てあるから此乃木大將の果斷なる爾靈山攻略の決心は、頗ぶる時

機に適確にあてはまつたるものてあると稱するを得るのてある。

十一月二十七日に於ける乃木大將の爾靈山攻略の決心は適當てあつた。即ち其適當なる決心からして如何なる處置をせられたかといふと、其實施の次第に付ては隨分と大に評論すべき事柄が少なくない。て今から其爾靈山攻撃實行の要點〳〵を摘んて、それ〳〵〳〵其適不適利不利の研究をすることにし樣と思ふが、其戰況の進捗推移をこゝに一々詳述して居ては、爲めに非常に本評論の頁數を增す而已て餘りに效能はない樣てあるから、其戰況は戰史によりて諸君の御一覽を願ふことゝしして、單に其要點而已を摘評し拔論して諸君の參考に供することにし樣と思ふ。

第二回の總攻撃以來非常に愼重に正攻準備を整へて、十一月の二十六日より愈〻これなれば多分は敵を擊退し得るてあらふとの考へて開始したる第三回の總攻撃も、何れの方面に於ても頗ぶる慘憺たる大惡戰を繰り返したる而已てあつて、敵は依然として頑強を極めて防守するので到底容易にこれを突破

し得ぬ。そこで前にも述べたる通り其手段を一變して、爾靈山の一點に我が全力を集中して遮二無二之を突撃して、以て敵全港内を瞰制し得べき此の旅順最要の鎖鑰地を奪略せんとした。即ちそれが爲めには碾盤溝附近にある所の榴彈砲はいふに不及、重なる重砲諸隊をして其火力を悉く爾靈山に集注せしめ、又其他の諸野戰砲隊をして敵の此の爾靈山攻略を妨害すべき諸砲兵に向つて大砲撃を加へしめ。第一師團の右翼隊と中央隊を以て爾靈山及び老虎溝山を、二十七日の午後六時頃から猛烈に突撃せしむることに手筈を定めたが。此の右翼隊長たる友安少將は後備歩兵第十六聯隊の中から第五、第六中隊を缺けるものに、機關銃二門を附してこれに爾靈山攻撃を援助せしめて。後備歩兵第十五聯隊の第四、第七中隊を缺けるものに、機關銃二門と工兵一小隊を附して爾靈山西南部を攻撃せしめ。前掲兩聯隊から控除したる歩兵四箇中隊と騎兵一分隊を豫備とした。又中央隊長馬場少將は歩兵第一聯隊に戰利速射砲二門と、機關銃六門と工兵一小隊弱を寺田錫類中佐に指揮せしめて、爾

靈山の東北部と老虎溝山を攻撃させ。秀島少佐(故大佐)の率ゐる歩兵第十五聯隊第二大隊に工兵一分隊を附して、化頭溝山西方高地の攻撃を準備せしめ。同聯隊第三大隊の半部に標高一〇二から標高一〇八高地東北谷地に亘る間を守らせ、其第一大隊を以て豫備隊としてこれを南山坡山北方の谷に置いた。即ちその攻撃の配備は前述の如くて相當に適當なるものであつたが、敵情の不明なる場合此の險難無比の高地を攻撃するとしては、其兵力は決して充分てあつたとはいふを得ぬと思ふ。而して此の右翼、中央兩隊ともに何れも午後六時を期して突撃して、各、其目的とする山上の最高所までは勇敢に邁進したけれども、非常なる損害を被むつたる爲めに終にこれを維持し得ずして、最初の攻撃準備の位置まで退却せざるを得ざるに至つたが。これ實に敵の此爾靈山の陣地たるや、爾靈山そのものが既に其巓頂は瓢簞形をなして居て、西南と東北と兩高地は互に相側防し得るのが既に其巓頂は瓢簞形をなして居て、西あつて此の爾靈山と互に其前方斜面を、餘程遠方まで掃射的に側防し合ひ得る便ある而已か。其右には老虎溝山が

るばかりか。左方には膝家大山があつてこれまた充分とはゆかぬとしても、此の爾靈山西南高地の左側を側防して居るのであつて。若し此の高地を攻撃せんとするには隨分と大なる兵力を準備して、此の爾靈山兩高地と老虎溝山、膝家大山を同時に攻撃するのが必要であつてある。第一師團長ももと〳〵其計畫を以て攻撃を實行せしめたのであるが、土地が險難を極めて居たのと我砲撃の準備は決して不足てはなかつたけれども、敵も亦死力を盡して頑强に防守したる而已か、出來得る限りの砲門を此の山上に向かはしめて、猛烈を極めたる大々的大砲撃を行ふたる爲めに。午後六時に一齊に實行に著手すべき筈の突撃も、到る所に於て遲速を生じたる爲めに、敵は其我が突撃の各箇各別になれる不利をつけ込み、四高地互に相協同して巧みに側防射撃を決行した。就中最も大なる兵力を備へたる老虎溝山には、我が歩兵第一聯隊の第二大隊が向つた而已てあつたから。此老虎溝山の守兵は右の大隊の攻撃を防止し得たる而已てなく、烈しく且つ熾んに爾靈山攻撃部隊に酷烈極まる側射斜射を

充分に決行し得たのてある。て此の二十七日の夕方の攻撃は其兵力が充分てなかつたのと、敵の砲撃が非常に烈しかつた爲めに、各攻路頭から突進する各部隊の突撃に多少の遲速が生じたのを。敵は機敏に利用して四山互に相側防し合ふた爲めに、一度は何れも勇敢無双に其目的點まて何れも略ゝ到著して占領しては居りながら。終にこれを維持し能はずして敵の必死の應援と、其想像も及ばぬ程烈しき逆襲との爲に、終にあたら一度占領したる要地〳〵を再び敵手に渡すに立ち至つたが、これ實に其突撃が何れも同時に各方面齊一に行なはれなんだのが、抑ゝ最大の原因てあると評者は思ふ。勿論軍司令官が本攻撃正面から敵要塞を突破せんとして、其實行が失敗に歸した爲に更に急に爾靈山を攻略するといふことに、其計畫を咄嗟に變更したのてあるから。其攻撃の部署配備も亦其兵力の集結も、勿論思ふ存分にはゆかなんだに相違なく。隨つて其攻撃に當つた右翼、中央の兩隊長も隨分と其攻撃實施は困難てあつたらふ、その上に敵は優勢なる兵力を有して我を瞰制し、我は非常な

る峻山を攀登しつゝ之を仰ぎ攻むるのであるから、有ゆる不利益が此第一師團の攻撃には殆んど蝟集して居るのである。からして此様なる不結果を來したのであるが、若し此場合今少しの兵力を此方面に加へて、充分に準備をして三方面一時に起て遅速なくどつと一齊に突撃して、同時に各山頂を占領する様に攻撃を指導したならば、或は此一戦て爾靈山を攻略し得たかも知れぬ。といふのは何れの方面も皆一度は敵の最高防禦線まで侵入して居るのであるから、これが同時てあつて且つ兵力が多かつたならは無論占領は確實に出來たてあらふ。これに就けても大に注意して熟慮研究すべきものは歩兵操典に掲ぐる左記の諸項てある。

『歩兵操典第一部第百八十八（前略）一ノ中隊突撃ニ移リタルトキハ他ノ中隊モ亦直ニ起チテ突撃ヲ行ヒ一歩モ後レザランコトヲ期スベシ

敵線ノ一部ト雖我カ猛烈ナル突撃ヲ受クルトキハ全線爲ニ動搖スルモノナリ故ニ大隊長ノ企圖スル突撃實施ニ先チ勇敢ナル中隊突撃ヲ實施セハ此機會ヲ捉ヘテ戰勝ヲ收メンコトニ努力スルハ大隊長ノ責任ナリ若シ先ニ進ミタル中隊ヲシテ孤立援ケナキニ至ラシムルガ如キコトアルトキハ全ク大隊戰鬪ノ本旨ニ悖ルモノトス』

然り〳〵眞に大に然りてある。これ豈に單に大隊戰鬪而已に限るものならんや、如何なる大なる部隊に於ても決して然らざる理由なき筈てある。此の條項にして能く完全に遵奉せられたならば、思ふに此の日の爾靈山の攻撃は必ず成就せしめ得たてあらふが、種々樣々なる事情の爲めに各別各箇の突撃をなすに至り。加ふるに其兵力が割合に寡少なりし爲め、先進中隊をして孤立援なきに至らしめて終に舊位置に退くに至つた。これ實に萬々已むを得ざる場合てあつたとはいへ、若し今少しく突撃前に於いて其攻撃の準備に意を用ひ、且つ其兵力の集注に勉めたならば、まだ〳〵我れに有利なる戰果を收め得られたてあらふに、去るにても殘念なりしは此日に於ける攻撃實施の不結果てあつた。

二十七日の攻撃は殘念にも大なる效果を齎らさずして、忽ち廿八日の天明とはなつたが、第一師團の右翼隊も中央隊も、昨日退ぞいて守りたる所の陣地を保持するだけで如何ともすることが出來ぬ。先是此狀況を知りたる第一師團長は、拂曉後更に砲兵をして充分に砲擊を以て突擊を準備せしめて、然る後に於て師團の豫備たる後步第三十八聯隊の第二大隊を右翼隊に增加して、中央、右翼兩隊の全力を擧げて一擧に山頂を占領せんとし。右兩隊長には極力現在地を固守して障碍物を破壞すべく、又右翼隊の右翼にある平地方面の部隊には其前面の敵を巧に牽制すべく。更に砲兵諸隊には拂曉を期して此攻擊を援助すべく命令し。其突擊實行の時刻を午前八時と定めて、午前五時頃に於て各〻其部署をなすべく命令した。

此命令を下す前後に於て軍司令官は、軍の總豫備隊たりし步兵第二十六聯隊(第三大隊欠)を南山坡山に前進せしめて、萬一の場合の應援を容易ならしめてくれた。斯くて拂曉と共に碾盤溝の榴彈砲隊は極力爾靈山を射擊して、其

效果の偉大なることは我諸陣地からもこれを推察することが出來る程である、これと同時に爾餘の諸砲兵も相競ふて猛烈なる彈雨を此の爾靈山而已に注ぎかけたので、流石の頑敵も午前八時少し前には非常に困難を極めたる模樣が見へ出して來た。

此機を察したる友安右翼隊長は、直に突擊を決行すべく後備步兵第十五聯隊長の香月中佐に命令し。新に增援されたる後步第三十八聯隊の第二大隊を、爾靈山西北谷地に進めて推進の第一著手をなし、香月中佐は命を受くると同時に略〻前日と同樣なる配備を以て、新手を入れかへて右の攻路からは第二、第七、第三中隊の順序に、左攻路からは第五、第六、第八中隊の順序に何れも中隊を前後に重疊して、爾靈山西南高地へ向つて大吶喊をあげつゝ突擊を決行した。それ迄は我が硝煙彈雨の爲めに屛息して、居るか居らぬか知れなんだ敵兵は、健氣にも此の破れ崩れたる堡壘の中より激烈を極めたる射擊を開始し、盛んに手榴彈を投擲して我前進を極力阻止せんと死戰したが。香月中佐は死傷の

山をものともせずして鐵條網を打ち破りて挺進し、我が先進の一部隊は敵の第二線の散兵壕の一部を奪取したけれども、こゝを先途と死にもの狂ひになつて手榴彈を雨霰の如くに投げ出す勇敢なる敵兵の爲めに支へられ、死傷續出し山上まで突進してこれを全く占領するの力がない。此の有樣を見たる友安少將は其手中にありし後歩第十六聯隊の第三、第四中隊を、急驅これに增援せしめて是非とも山上の略取を確實にせよと督促し。香月中佐はこれに少しく勢を得て、潘道子山に備へたる後歩第十六聯隊の第一中隊に猛烈なる援助射撃をなさしめて、勇猛果敢に奮戰格闘して午前十時三十分爾靈山西南部の巓頂全部を奪略したのは、實に勇しい勇戰のやり方であつたが。惜しむべし此勇戰も時の間にして全く水泡となつて仕舞たのは實に殘念千萬であつた。

此の樣に香月中佐が右翼隊の任務を一人の双肩に荷なつて奮闘に奮闘を重ねて居る最中に、中央隊は何をして居たかといふと。これも歩兵第一聯隊と歩兵第十五聯隊の一部とを以て、爾靈山東北部を攻撃せんとして著々其準備

爾靈山上ノ爆彈戰

九十九道人石原白道畫伯筆

をなし。聯隊長寺田中佐は午前八時全力を擧げて突撃に移らんとせし時、武運拙なく敵彈の爲めに重傷を負ふて指揮をとることが出來なくなつたので、第一大隊長枝吉少佐が之に代つて突撃せんとしたが。此の大切の場合の勇將の負傷は全聯隊をして全く志氣を沮喪せしめて仕舞て、最早兵卒は殆んど其爲すべき所を辨へぬ程に勇氣を挫折して、中央隊長の馬場少將が自から攻路頭に進んで勇ましくこれを激勵したが、何の效果もないといふ腑甲斐ない有樣になつて仕舞た。即ちこれが爲に折角其巓頂まで勇敢に占領したる香月中佐の爾靈山西南部攻撃隊も。此の同山東北部に同時に突撃すべき約束の寺田中佐の第一聯隊が突撃せぬ上に、老虎溝山の攻撃部隊も依然として舊位置にへばり付いて居た爲めに、敵は此香月中佐の孤立したる先進部隊に向つて、同山東北部と老虎溝山と膝家大山との三方から猛射を加へ。更に其れよりも近い所の爾靈山鞍部の凹地からは、手榴彈を投擲しつゝ逆襲をして來るといふ非常に困難なる位置に立つて、終に一度立派に奪略したる同山西南高地を

棄てゝ退ぞくに至つたのは、實に切齒にも扼腕にも堪へられぬ程に殘念で堪らぬが。これ即ちいふ迄もなく歩兵第一聯隊が突撃の機を逸したのが其原因てあつて。此の爾靈山東北部攻撃隊が其約束した突撃の機を誤まつたのは、其主なる原因は即ち寺田錫類中佐が重傷を負ふた爲めてあつた。

此の寺田錫類といふ中佐は、隨分と古るい少佐てあつたが南山以來の勇戰て非常な功勳を顯はし、平素は稍〻老朽視せられて居た同君も忽ち戰場の花と謠はれて。天照皇大神と神祖の御名を美事に刻み附けたる三尺、近い大刀を常に眞つ甲に振りかざして、自から陣頭に立て勇戰健闘したる同中佐の勇姿は、此の聯隊全體の志氣を鼓舞したこと一方や二方てはない。寺田中佐の進む所は必ず勝つと迄に部下は此の中佐一人に信賴した。又同中佐も此の我が神祖天照皇大神を代表せる一刀を携ふる上は、決して敵の彈丸などは中るべきものてないと確信して、悠揚迫らず敵彈雨飛の中を平氣て濶歩して居たのてあつたが。時の非なる時は實に何としても致方はない、此日此時此の香月

中佐と東西相應して敵中に突入すべき、極々大切なる一刹那に於て此の勇將が負傷したので、全隊の志氣全く挫折して又如何ともすべからず。爲めに此の方面が突撃決行をなし得なんだ而已か、折角十分に目的を達したる香月中佐の部隊まで、捲き添へにして其勇戰を水泡に歸せしめたのは、全く此の中央隊の腑甲斐ない勇氣の萎靡が大原因てあつた。これによりてこれを見ると彼の陣中要務令綱領第八に掲ぐる所の

『將校及下士ノ一擧一動ハ悉ク部下ノ模範タリ愼マサル可カラズ殊ニ劍電彈雨滿目悽愴ノ間ニ立チテ沈著機ニ處シ泰然トシテ動カザルトキハ森嚴ナル威容自ラ外ニ顯ハレテ部下ノ屬望ヲ繫持シ以テ其志氣ヲ作興シ成功ノ因ヲ固ウスルヲ得ベシ平生修養セサル可カラズ』

といふ一條は實に不朽の金言てある眞理てある。若し此の場合一人の寺田錫類中佐が今迄の如く健全て此隊の陣頭に立つて勇戰したならは、思ふに此の一戰て爾靈山は確に占領し得られたてあらふ。左すれば此の以後に於て何

千何百の人命を此の山上山下に喪失するの必要はなかつたてあらふ。實に一人の勇武一人の生死が如何に大なる影響を全戰闘に及ぼすものてあるかは、此の一例を見ても驚嘆する程に絶大てあることを知ることが出來樣。而して評者は深く此の歩兵第一聯隊が單に一人の寺田中佐而已に信頼して、其一人の負傷の爲めに全く志氣を沮喪せしめたのを大遺憾に思はざるを得ぬ。即ち これ換言して見た場合には同聯隊長寺田中佐は、非常に勇猛てあつて全隊の志氣を繋ぐに充分てあつたが。其他の大隊長も中隊長もはた將校下士も、其資質が遙かに此の聯隊長に及ばなかつた爲めに。寺田中佐の負傷と共に之に代つたる長袖出身の枝吉少佐が、其泰然たる威容を以てしても部下の衆望を繋持するに足らなんだのは殘念てある。否々枝吉中佐而已てはない其中央隊長たる馬場命英少將(現中將)が、其攻路頭に立つて威風凛々として士卒を激勵しても、遂に此の中央隊の志氣を再び作興することの出來なんだのは、蓋し此隊の幹部諸氏が其平生に於ける修養に於て聊かも缺ぐる所がなかつたとはいへまいと思ふ。但し此所に評者は一言して見たいことがあるといふのは外てもない、志氣を興奮させる爲めに種々なる手段を用ゆるのは、古來の英雄の慣用手段てあつて。一と掬かみの錢を神前に投じて其錢が悉く表を上に出したならば、此戰は必ず大勝利てあると豫め嚴島神前に祝福して、內々裏合せに貼り合せた錢を用意してそれを擲つたる豐太閤の手品の如きも。隨分人を馬鹿にしたやり方てはあるが、巧にゆけば隨分これても衆望を繋持することが出來る。乍併此やり方は兵卒をして迷信的に自分を信頼せしむるのてあつて、深沈大度迫らず驚かずといふ大勇が溢れて、見る者をして不知不識の間に感奮興起せしむるのとは、其間に雲泥霄壤大なる相違があると自分は思ふ。聞く所によると寺田中佐は非常な勇士てはあつたが、常に自から其家に傳はる所の天照皇大神と其刀身に刻したる明煌々たる大刀を引き抜きて部下に示し。自分の此の大刀には神助がある天佑がある、此の刀を自分が持つて居る以上は自分は決して怪我もせねば戰死もせぬ、又自分の隊は決して戰に

は負けぬと揚言して部下の心を鼓舞したといふことである。如何にもこれは其一手段としては大に利益もあるであらふが、若し萬一部下が迷信的に其刀の神助と天佑と而已に信頼した場合、若し此の刀が折れて其所持者が死傷した場合が生じたとしたならば何とする。此の刀の不思議を迷信したる度の深いだけに、それだけに此の迷信したる士卒は其志氣を挫折し其勇氣を沮喪する。論より證據此の中央隊が全く腰を拔かしたのも、詮する所此の寺田中佐の激勵の爲めに用ひた迷信的傾向を有する揚言が、此の大切の場合に正反對なる效果を現はしたものであらふと評者は思ふ。若し此の寺田中佐程の勇士が其樣な兒戲的なる處置を取らずして、平素の自己の沈勇と自己の大度とを以て、信實に其部下の志氣の中心となつたならば。若し此先天的の大勇士一人が死んでも、これ程までには志氣が挫折はせなんだであらふに、惜しいことをしたものである。これ實に志氣を激勵するにも餘りに奇妙なる手段を用いぬがよいといふ、立派なる實例を遺したものとして、これを銘肝するの必

要があると評者が信ずるのは間違ひではあるまい。それはそれとして如何に一人の力の偉大であるかは、實に此の爾靈山攻撃の中央隊の突撃中止が、全く此の一中佐寺田錫類君の負傷に基因することを知つたならば、必ず何人と雖も陣中要務令綱領第八の眞理であることを否認するものはあるまい。何と青年將校諸君其樣な絶大なる信望を部下から得るのは、一に平生の修養と日常の覺悟如何にあることを了解せられたならば。何卒常に油斷なく常に精神を撓ませぬ樣にして、此模範的の威容を自然に體得する樣にならなくては。我大日本帝國の將校といふ價値はないといはれても致方あるまい。これあればこそ日本軍は清軍にも勝ち露軍にも勝つたのである、大和魂も武士道も詮する所はこれである。內に養なふたる勇氣が自然に外に溢れ出て、それが兵卒の手本となりそれが部隊の重りとなつて、それで始めて常勝の軍隊が成立し得るのである。即ちそれが爲めには我々幹部たるものは一日も否々片時も分秒も、勇武を研き精神を鍛練することを怠つてはならぬ。